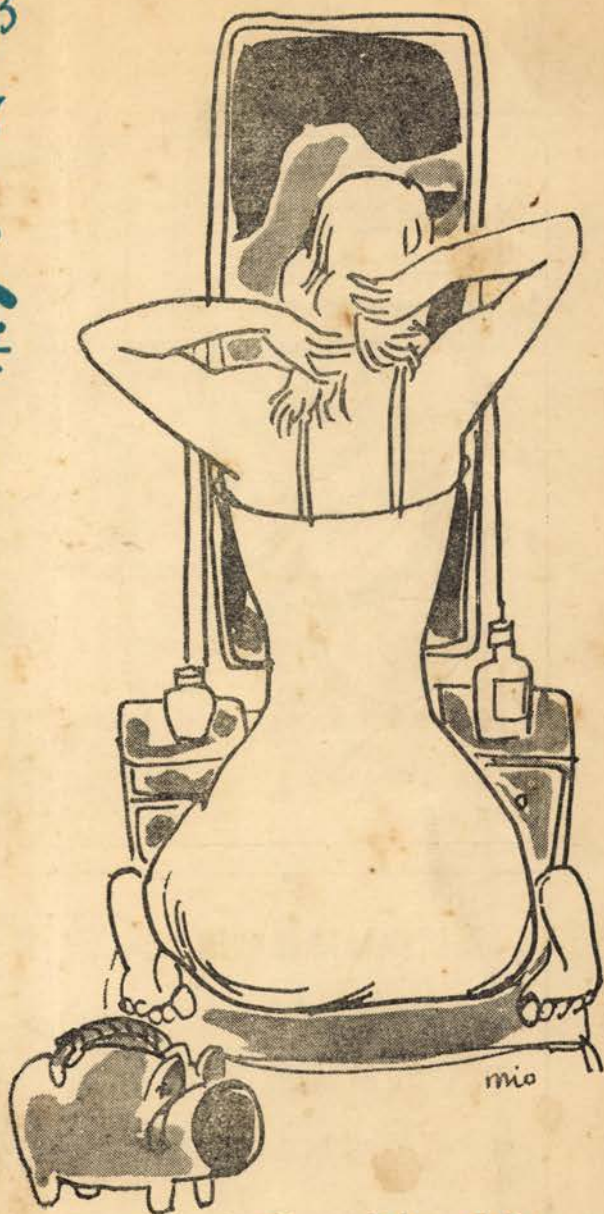


Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.315

麻生路郎☆主宰



八月號

川

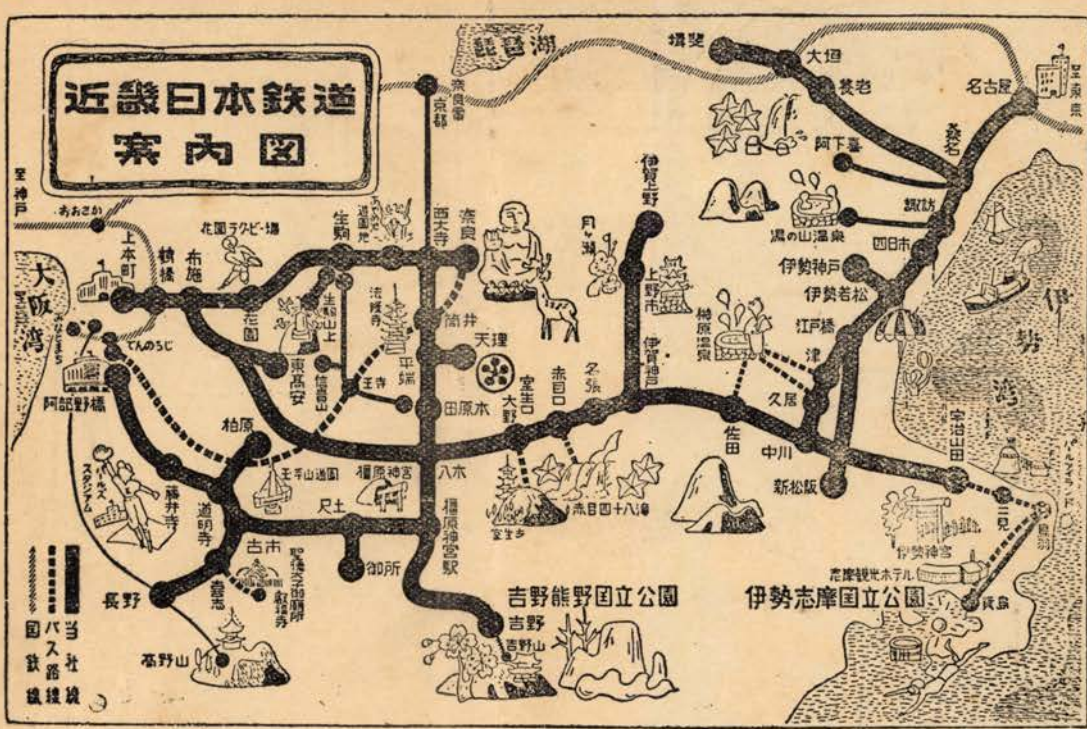
柳

の雅

証

八月号目次

題字	麻生路郎
表紙	米田三男之助
川柳街	山雨楼・久米雄 不二・満年 (四)
ペンの錆	麻生路郎 (三)
漫語覚帳	小山文三 (六)
緑の生駒へ	諸家 (二)
川柳の歴史	福田山雨楼編 (三)
人間横丁 (IV)	東野大八 (七)
窓口談義	麻生路郎 (五)
哲水逝く	(四)
哲水句抄	(四)
★	
不朽洞句帖	麻生路郎 (三)
近作柳欄	麻生路郎選 (六)
川柳塔	麻生路郎選 (八)
同舟近詠	諸家 (二四)
一路集「社長」	川村好郎選 (一五)
「綴友」	西尾栗選 (一五)
各地柳壇	(二六)
柳界展望	(二四)
不朽洞会から	(三〇)
編輯局にて	(三〇)



暑中御伺 川柳雑誌社編輯局

麻生路郎 麻生葭乃 麻生梨里 福田山雨楼 戸田古方 市場没食子 北川春巢 丸尾潮花 眞鍋一瓢 八木摩天郎 中島生々庵

OSK

毛織物 既製服 製造卸商

株式会社 大坂商店

大阪市東区糸屋町一丁目二 電話東〇一七四五番



高島・昭々生島中から左てつ向列後 山貴龍友・トーフ生島・黒髪生島・藤野生島 6から左てつ向列前
(影器んやち之孝島中)氏諸の則正島龍・人其龍王・ちとへ島小・志島龍後・林吉郎武・野星西・貴雄

生駒の上山句

ペンのか

吟行

六月に、暗峠から生駒山上へ吟行を試みた。鷲や、ホトトギスの声をふんだんに聞いて急阪に汗した。その昔、芭蕉や宮本武蔵などが、両刀をたばさみ僅かな身の廻りの品を肩からハスにかけて、てく／＼と暗峠を往來した姿を思い浮かべた。吟行は名句を作ると云うよりも、同じ趣味に生きる人達が、行楽を共にして、野趣を満喫し、古人を偲んだりとすると、より有意義だと云えよう。

この日、誰も彼れもよろこびに満ちていた。殊に、へち老などは、小学生が修学旅行に來たようなハシヤギ方であつた。酒もタバコもやらぬへち老は、ジャパニーズチュ

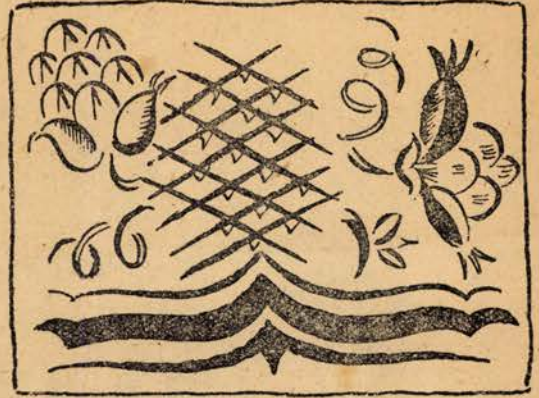
ーインガムだと云つて、甘い昆布を一行に配給したり、わざわざ東京の三越からくさやの干物を買つて來て、山上で焼いて、みなにデゼケートしたりして一日をホントにゆかいに過していた。カメラマンとしては生々庵医博の三男防の孝之やんが活躍してくれた。山上句会がすむと、誰云うとなく、飛行塔のボートに乗ろうと云い出した。孝之ちゃんに「大人で無邪氣やな」と皮肉られても、ひるむものはなかつた。一行は嬉々として航空艇に乗込み上空遙にセンカイしながら上昇した。煙と埃りの大阪が、西方の眼下に震んでいた。

不朽洞句帖

麻生路郎

停年退職書も浴衣の人となり
出鱈目に生きて米壽もないものだ
よく怒るようになったにフト氣づき
人前はあんな女と云つておき
四十では女もあどえひかぬなり

にせ歌のこと
寛政六年の八月に、安元法印が一橋中納言の命をうけて、養生の



— 評 句 —

川 柳 街

福田 山雨楼

浜田 久米雄

宮田 不二

藤本 満年

四月号川柳塔より

ガミ／＼と言つて仕舞え
ばもう正午 (半休門)

山雨楼Ⅱ軽い自嘲句と見る。日曜か休日などのひる前、氣に障つた女房か子供かの言動をたしなめるため、ガミ／＼叱りつけている内に少し言い過ぎたかなと自省する、一瞬氣まずい沈黙がつづく、はつと己にかえつて見るともう正午になつていた。顧みて自分乍らはしたなかつたと後悔する氣持がくみされる。句主は鐵道人で人一倍時間の觀念が堅い、そこに何かしら軽いおかしみが感じられるのである日常茶飯事もこうしてさらけ出されて見ると句主としての一つの態度があると思ふ。

満年Ⅱ同感ですね。自省と自嘲の句として共感を呼ぶものがあります。

不二Ⅱ山雨楼先生がトップを切つては小生如き若輩何をか云わんやですがこれも勉強の一つと末席をけがす次第、ガミ／＼の主人公が誰か係長課長と云つた方と見ても面白い句ですね、半日ガミ／＼云つていけるのも給料の内かも知れません。云われる方は嗚呼弱き者よ汝の名は平社員なり。久米雄Ⅱこの句の主人公は案外腹のない人のように思われ、腹のないという意味だが、家庭でもよし勤め先でもよし、腹の虫のおさまらぬままにガミガミ云わねばならぬ性分

の持主であるからいたし方がない、云うてしまえばそれまでであるが、正午——晝めし——空腹に氣がついたところ、この句の軽い味がある——あつさりとしたお茶漬の味が。山雨楼Ⅱ吐の問題が出たので一言すると、元來川柳は腹から吐露するもので(短歌は胸のしらべ、俳句は皮膚の独白)所謂思うこと言われれば腹ふくるたさえのとおり、思っていることをすばすば言つてのけるところにその面目があり、またおかしみの詩情をたえて句を吐くことによつて、自ら句主の人間陶冶がなされるのだと思ふ。この句の句主は吐に持ちこたえない

方かも知れないが、こうした反省によつて段々吐ができてくるのではなからうか。満年Ⅱ皆さんの御意見に全く同感です。殊に山雨楼さんの川柳は吐から吐露するもの、このお話は非常に教えられるところがあります。

四月号川柳塔より

獨立／＼又も死ねとや言ふならん (花村)

山雨楼Ⅱ再軍備と云わずして獨立々々をもつて來た点に含みがある。逆コース復古調はえてして國民の命を鴻毛の輕きに比して忠義を強要し勝ちである。思い出してもぞつとさせられる。しかし獨立と國土死守と云う問題は最惡の事態に直面するよりベラリストで押通されるものかどうか。この句は一應最大公約数的な國民感情をうたつていけるが、必ずしも歴史的必然に反抗するものでもないようである。

満年Ⅱこの句は一昨年二月の川柳塔で同一作家による「地球をば血でぬる／＼にする氣かや」ど好一對です。どちらの時事吟で地球をばの句は同じく一昨年川維六月号に女性ばかりの句評川柳街に取上げられて非常な好評を博したものです。たしかに二つとも面

白い着想であり、表現の面白味もあります。殊に獨立の句は今日の世相を、地球をばの句は朝鮮戦争を風刺する思想を背景にしているだけに感銘も深いのですが、どこか文学の遊戯といったような臭いもないではありませんね。

不二Ⅱさすがは花村さんの句、又も死ねとや、だが少くとも明治生れの僕は死ねと云う言葉には近寄り度くないです。だが又当節は軍隊にあらざる軍隊、二十代の志願者殺到とか、これも天然景色のつららしいです。

久米雄Ⅱ獨立という語の裏に再軍備をほのめかしていることは一應うなづけるし、再軍備によつて又戦争をするから赤だすきをかけないの聲が聞こえて來るようだ、字句にこだわる必要はないかも知れぬが、作者は獨立／＼と重ねたところ語を強めるために必要であつたかも知れない。八七、五の句によつて再軍備が又獨立がそう強くひびいていけるように思われたい。近頃はこういう句の表現がよいのかどうか知らないが、獨立／＼……ならん、なんだかきこちないような氣がする。満年Ⅱ破調の句として成功し

ているだけでなく、句に思想の背景をもつのは、深みがつてよいのですが、度々このような表現手法を用いることはキザでないこともない。

四月号近作柳樽より

悪い事ばかり女房の里に

（芳泉）

山雨楼 大正時代の句だつたと思うが「妻の母少しおれを買取り」と云うのがあつた。新婚当時の甘さがある。ところが生活の苦しい昨今はそううまくはゆかない。とかく知られたくないこと、誤解や偏見にもとづくこと、家庭の外にもれやすいのである。

悪事千里を走ると云うことわざがあるがそのてつである。大きく云つて戦争の痛手によるものとも云えよう。この句はしかし暗いばかりではなく諦めと希望をつかもうとしているように思う。

満年 軽味の句ですね。おそらく悪い事ばかり女房の里に知れたところで大したことはないという一種の自信もあるようです。だから軽く口にも出れば句にもなつたのでしよう。

不二 御両人の御意見通りですね。

久米雄 生涯を通じて御主

人のことまたは夫婦の間のこの中で女房の里に知られたくないことがそう沢山はあるはずがないと思われるが、たゞ一つでも知られると云ふと夫の気分がよいとは云えない、その一つのことが惱みとなり、句となるとすれば御主人はいとも小さい心を持つておられるのではないか、しかしまあ句としてうなづけるしおもしろいと思う。

満年 少くともボリュームはない。

五月号川柳塔より

女房はひびがあつたを主張する

（幽王）

山雨楼 大切な茶碗か瓶の類をこわしたのであらう。そのうした妻はその物に前からひびのあつたことを云いつのり責任をのがれようとする。主張すると云う大げさな言葉におかしみがある。

満年 少々女房に押され氣味ですね。或は句主は恐妻家かも知れません。

不二 女房の云うことは皆尤もなものです。それをすなおに受け入れないで一應からんで見る夫の悪い見得を作者は肯定して女房に対する同情から出発した句と見る僕は尊妻家

か。

久米雄 家宝として珍重がられるものか、或は毎日夫がたべている茶碗かどちらにしても妻のまじめさをいじらしく考えさせられる句だ、夫婦の間のいざこざがよい意味にせよ悪い意味にせよ人世を形作つて行くし、毎日の生活にうるおいを持たせもする、主張する妻の顔に人間味があ

り、川柳のヒントがあるわけだ、老練の句。

満年 生活を見事な句にすることは作家として楽しいこと、句のもつ内容よりも、句材をよく消化する作者の腕前に敬意を表したい。

五月号川柳塔より

甲斐性もない癖義理を立たたがり

（井蛙）

山雨楼 日本人にはこの種の男性が少くない。句としてはコンモンヒューマニティに終つてゐる。

満年 そうですね。やゝ常識的ですね。甲斐性もない癖という癖の字の響が耳ざわりですね。

不二 成る程甲斐性もないのに……。

久米雄 「も」というからには何かがあつてまたもつけるのが当然だと私は思つてゐる。それなのによく「も」を使いたがる人が多い。「も」ははつきりしないから句が弱

くなつてくる。この句もまた平凡の域を脱し得ない。これを「甲斐性がないのに」としても。

満年 私はいつてもこのような作品に当面すると、川柳そのものの解釈に苦しむ、川柳を呼吸する生活を味うため、実に巧みに生活を詠んでゐるのを感じしながら、短詩文学としての川柳である以上、この句の中から詩性を見出さねばならない。さて詩性とは、この句のリズムの佳さというのか、この句のもつ内容をいうのか、表現の巧さをいうのか、少しばかり割り切れないものを感じる。

五月号川柳塔より

三寒に縮み四温は風邪に寝る

（満年）

山雨楼 三寒四温は朝鮮が本場だが関東にもこうした傾向があるように思う。山陽地方から東京に移られた句主は特に敏感にそれを覚られたのであらう。関東では一日の中にも氣温の急変があつて新米は面喰うことがある。生活句として面白味のある表現である。

満年 自分の句が出たのには驚きましたね。三寒四温は日本では正確には来ませんが、寒い日、温い日というのを誇張していつて見たもので、実

にお恥かしいものです。不二 余りにも鮮かな場外ホームラン的な句ですね、こう云つた古川柳的な生命の長い句を僕自身常に念願して居りますが勉強が足りないのは赤面の至りです。

久米雄 朝鮮、関東、そして岡山にも三寒四温がある。この句はこの合評の中でいつち好きな句である。特に句主夫婦とよく顔を合はしていた私として東京の生活からにじみ出たこの句を読んてなつかしい思ふがする。

満年 それは過褒です。赤面します。でも、句主がなつかしいといつていただけることは大変有難く思ひます。

アサヒビール
いつでも どこでも
三ツ矢サイダー



三文山小

なその名調子は永く記

造花と裝飾店三星堂が八七八番

れる。

50



人間横丁 (IV)

東野 大八

洋服

この正月は新品の洋服で、年を迎えた。けれど十年ぶりのことである。ちと地味すぎるが、濃緑に細かい黒筋が入っている。生地は舶来でウーステットというのだそうである。どうしてこんな身分不相応なものを作ってしまったのかいまでも判然としない。とにかく昨年十一月のある日のことである。一人の男が大きなボール箱を抱えて現れ、それを鄭重に私の前に置き「ハイ、出来ました」といった。私は一瞬ギョツとなり、然るのちア然となつた。注文したのは、なんでも盛夏七月だったそうで金がないから仕上げは十一月のことかといったという、この私がある。いづれにしてもかくな

にいった。こつくりとそれに一つ私は子供のようになり打ちうなづいていた。あけて四十という私がである。

敬 稱

人の和、ということの一つの方便に敬称というものがある。職場における場合など、特にこの点に留意する必要がある。後輩が先輩を呼び捨てにしたり、部下が課長をオイと呼び止めたりするのわ、いかに個人的に親しい友人関係でも職場では遠慮した方が賢明なようである。ある宴会で「今日は徹底的に無礼講でいこうと部長がいつたので、そのつもりでやつたら、お役所だっただけに七生までタ、るほど上司からニラまれはじめたといふ。

忍 耐

私の場合、この点については大いに意をはらい徹底している。それといふのは、現在の社に入社以来今日までの九三年間、下は給仕君から上は社長まで、オール「さんづけである。昨日今日入った新入社員までこの調子なので、私から名前を呼ばれるたびに、やつこさんたちは恐縮している。親しい

私の友人たちは、はじめこの言葉づかいを片腕の不具者の卑屈ともみていたらしいが、「西郷さんだつて後輩を敬称で呼んでいたように、これは私の出身地四国のお国ぶりだよ」と私の言い分を、小首をひねりながらも納得していたようである。しかしこれはゴマかしで白状すると私の信条はこうなのだ。「つまり一率平等にさんづけで呼ぶことは、社長も給仕も同格そこには真の敬称はあり得ない」君とさんづけのしわけに苦しみ「氏」なぞとさむらい言葉でまごついている人たちをみかけるたびに、イタに思つたさんづけで至極私は気が楽である。第一こんな例まである私が帰つたあとで新婚の後輩の奥さん曰く

「貴方をさんづけであの部長さん呼んでたわね、いゝ方ね」

私にとつていやな夏がやつてきた。片輪ものゝ私は人前で裸になれないからである。職場でみんながランニング一つ、半裸に毛ずねをむき出しにして、至極気楽にやつてのけているのに、私はシャツ一つにもなれず上衣を引つかけてフーイーいつてる図は、よそめに暑くるしい限りだと思う。時には見かねた一人が、いゝから裸になつたら……と親切にいつてくれるが、ナアーニ心頭滅却すればでね、裸よりこの方が涼しい位だぞとケロリとした顔で答えてみせる私である。

とところで私が通勤する、朝夕の汽車の中で、よく顔を合せる一老紳士がある。大変身だしなみのいゝ人とみえ、どんなに盛夏の油でりの暑い日にも、上着をかついてる姿をみたことがない。この人とこのほど偶然座席が一しよになつて、先方様から声をかけられ四方山の話をした。この人も私の身体を承知しているとみえ「上衣もとれない夏なんて、およそたまらんですね、お互いに……」という。いゝ機会だと思つたので「私はとにかくご老体の貴方には感心していますよ」と暗にそのたしなみのよさをほめたら、その紳士は何を思つたか、いきなり私の耳元に口をよせ、あたりに人なきをさいわい、こんなことをさゝやいた。

「私も人並に裸でうまいビールの一本でも飲んでみたいのですが、実は身体一面この腕首の近くまでイタズラしましてね、思えばツマラんことをしたもんです」イタズラとはなんであらう。けげんな私の顔に再び老人は顔をもつてきて、

「イレズミなんです、南無法蓮の花が六つある。見られたもんぢやござんせん」

華経と背中一ばいに書いて、ハスの花が六つある。見られたもんぢやござんせん」

と今度は自嘲一ばいの若笑である。「いゝぢやありませんか、好きで自分が彫つた自分の身体、それにお歳もお歳、誰がみてもはずかしいもんじゃないと思いませんか」私は慰め半分にならういつてみた。すると彼は三度、私の顔へ口をよせていつた。

「××委員長という公職をもつてましてネ、こいつが実は私の裸を嫌っているんですよ。一口にそんならその公職をやめればいゝといわれそうですがね。それが貴方、名譽ある公職なんだから私の場合は大変な自由の束縛ですよ」私はこの言葉に、たゞなんとなし無意味にならういつただけだった。

片輪者の不体裁だという配慮からする暑さと、公職を持つからという理由で暑いのと、一体どちらに辛抱強い忍耐の比重がかゝつてゐるか。私はしみじみと家につくまでそのことについて考えた。そしてその結論は、私より紳士の方が、はるかに気の毒な、忍耐だとたゞとなしそふ思ひおよんだことであつた。



兵庫県 戸倉 普天

陳情団に混りて上京

はる／＼と上京たゞ一声で引下り
選挙違反事務長だけが引つ張られ
店長は奥で少々禿げて居り
牛の歩みもう今の世に容れられず

平塚市 木村 孤浪

やつと済み次の月賦を物色し
席ゆづつた人あり制服苦勞がり
貯蓄週間横目でにらむ暮し向き
開店は皆パチンコ屋のやう見られ
アパートで耳飾りでもあるまいに
忠実に見習車掌曲ります

運ちやんの怒りハンドルグイと切り

池田市 戸田 古方

青写真人焼く煙突設計す
いつそ煙になりたい日の多く

尼崎市 水谷 鮎美

疑へば女の帯の蛇に見え
もう逢へぬ見送り夜景きれいすぎ
貰ひ子に浴衣を着せて涼みに出
愛称のニツクネームのまゝ嫁ぎ

大阪府 市場 没食子
タダ酒の上にタクシーで送られる

返信は欠席二号さんが病み
中年の分別保守の匂ひがし
お年齢だ云われむかつとして歸り
左遷でも社宅があるでゆくとする
身の程を知つて未だにバット吸う
宝くじ未だに妻の一二枚

横浜市 福田 山雨楼

内灘は一発放つまでをもみ
大本山鶯だけが名調子
たゞ頼む心朝夕経を讀み
寝て書けば因果な親の愚痴つづく

任された話つまづき大きすぎ

東都市 村松 夢裡

吊り上げた眉は左程に利いて居ず
オルゴール靜かに鳴つて薄化粧
何時の間に關係と云ふ紐を巻き
放られてからをシヤンとした服装となり

盛塩の魅力忘れず靴をぬぎ
たまさかを女將の機嫌までたすね

人だかり何だ小猫の睨み合ひ
一寸見に娘と見える妻を持ち
お静かね云われ赤ん坊泣き始め

ホノル、市 市岡 曉舟

半裸体女の武器は大でした
眞二つに割れた世界に君と僕

池田市 黒川 紫香

ぬれタオルビールの露をうれしく見
見舞客ひたいの汗をふいてやり
保安隊歩調揃へて遊びに出

米兵にキャベツを持たす赤い爪

姉ちやんと呼ばせて罪の子を育て
しるこ屋の湯呑口紅つけて去に

大阪府 丸尾 潮花

寝返りをして豆球も消せと言う
どぶねすみお前も俺も生きている

他所さまの見るほど二号もろて居ず
かまきりの足をひろうて來たヒョコ

妻の肩もめば自分がおかしくて

大阪府 北川 春巢

マージャンの時は頭痛を忘れて居
奢られる氣は冷奴だけにする

お人好しだけに怒りも亦早し
五月からもう夏季手当あてにされ

奈良県 尾崎 方正

記念写真眼だけ見えてる写りよう
ズボンの皺へ新緑の陽が強し

プラトニツク毒の味に似てさびし
本降りになつて危篤の電話受け

土曜日は孫のお守と社長去に

下関市 櫻川 不水

けちんぼのその鋭さに寒氣が來
大阪で金のないのが馬鹿にされ

煮え切らぬ度胸女にこすかれる
美しい恋に刑事も引きさがり

新婚はラン／＼で迎えに來

岡山県 逸見 灯竿

力ない返事彼女をいらだたせ
田植唄封建型のまゝ唄い

青春の惱み新語をもてあそび
理屈と法規社交と食うことと

出雲市 尼 綠之助



大阪市 水谷竹莊

酔つても女將勘定間違わす

金出来て印相学に興味をもち

憎しみの言葉も云はず恋ゆする

博多にて

幼な名で呼んで呼ばれる友と飲み

二十年振初恋の妓に出逢ふ

恋未だ枯れず逢引したくなり

霧島温泉にて

銀婚の旅足弱の妻をつれ

下関市 弘津柳慶

裏街へ来た自動車の子が囲み

陳情へ窓から氣焔上げている

下関市 國弘半休門

宿題をやる間ない程ラジオ鳴る

店一つもたせて男疎遠勝ち

氣負けするほどに女の寄りかゝり

酔ざめの水で出て行く月曜日

京都市 大鶴喜由

金あれば故郷は左程遠からず

妻をほめたら十八の笑ひする

南無阿彌陀佛となへつゝ不行跡

今日は肩組み明日は蹴り合うエゴイスト

闘争に勝つた途端に社がつぶれ

吹田市 野本吞水

自省する日ありセールスマンの嘘

麦食はぬけれど長雨もて余し

尼崎市 小林文月

従妹の遺品

イアリングかつて彼氏の贈りもの

水間寺お夏清十郎の墓

忘れし碑もよくロケの役に立ち

大阪市 富岡淡舟

役に附くことが嫌いで草いちり

夏期手当の事で巡査とうまが合い

へば將棋お金の要らぬのが取柄

使い込みされると知らぬ盲印

奈良県 飯降白香

闘志満々たかが職員会なのに

梅雨のように母のくりごごとつゞくなり

愛すればこそ愚痴とは殺生な

奈良県 西辻竹青

入学は出来ましたがと未亡人

後妻でもよいわとしんみり三十二

山口県 長野井蛙

お上にも情があるを水を向け

晩酌の約束どの子もあてにせず

デパートの特價賣場で子を忘れ

紛藥へ大の男が眼をつむる

岡山県 直原七面山

綴り方妾の子とは書いてなし

妊娠へ一寸あわてた共稼

下駄までがくつき合つてゐる新世帯

物思ふ身に雨垂れの音も良し

文化説く講師万年床を敷き

保釈の身飲んでばかり居るのなり

お隣のボヤへ喧嘩を止めて馳せ

拗ねた娘と別れ／＼に見る映画

蠟燭の燃え止む如く消ゆる恋

大阪市 西森花村

さようなら徴びたハートと知らざりき

首吊りとはつきり娘言つてのけ

引き揚げてくしいしはる齒も総入齒

芝居めくせりふに底の浅さ知れ

擬國會本物よりも筋が立ち

アジャパーと云うてもおれず値上案

兵庫県 家沢薺花

優勝はしても幕下水を汲み

汽車からは百姓吞氣そうに見え

憂うつな顔月曜へ持つて来る

忙中の閑バリカンへ総掛かり

東京都 藤本満年

新聞の贅肉削る製紙スト

民藝のように素朴な女中いる

キャバレーの扉を押せば捕虜となり

五月雨が隣のビルを霞ませる

熊本県 西口如川

愛称か侮辱か運ちゃんとも呼ばれ

パーマもう皺の深さと釣合はす

約束の場所へネオンも避けて佇ち

施してやつた優越感があり

岡山県 福島鉄兒

お前など死んでしまえと云われたり

えゝ死んでやるわと派手にヒスラれる

葬式に使ふ金とは知らず蓄め

行商の今日も夕日へ荷が重し

父でない人が近頃よく泊り

東京都 藤本茶々

今月は新派がいゝねと言ふたけど

食べあいた頃に家の胡瓜なり

ウインドは見るものとして見とき

氣儘さと娘心を見てくれず

大阪市 塩浜一路



金だけがおい等の目的淋し過ぎ
すら〜と素直な言葉が出て涼し
若き日の歌を歌ふは老師なり
生きてゐるうちに貯金をして頂戴！

岡山市 服部十九平

嘘はよう言はんで味方が減つて行き
釣竿のことで車掌ともめてゐる
ネクタイの賣場恰好つけて見せ

岡山市 大森娛句樂

來客を知らず帰つた声を出し
此の次はどこにするかど猪口をさし
若やいだ妻は叱つて酌いで呉れ

兵庫県 若林草右

腕カパー今日の埃を吸ふて生き
宿帳へ割引をした年を書き

大阪市 足立春雄

佐度ヶ島にて
黒木御所ガイドの声もふるへかし
五十の処女ハリ鼠の様に生き

熊本県 有働芳仙

三時間浅学菲才がようしやべり
街録へキツスして來た声でなし
一杯は給仕が注いで呉れる酒

下関市 石川侃流洞

ゴミの浮く港へ札東舞う景氣
サイダーをぬいて女子部の宴になり
デザートでお茶を飲んで待ち呉け
女教師の恋は不倫なものに見え

大阪市 安岡珊枝郎

何にも飽いた芝居でもしようか風流座
退社時間何処で飲む氣か五六人

広島県 山田季贊
消火器をアクセサリーの如くつけ
新緑の櫻の下は屑だらけ

大阪市 山本葉光

殺せても産めぬ生命は神のもの
嘔吐いて置く必要のあるチャンス
拭き掃除母を助ける子に育ち

大阪市 東喜久堂

新の下駄舗道に副わぬ音を立て
大学を出て算盤が苦手なり
ハイヒール落ち着く先は露路の奥
齒痒がる親とも知らずいじける子

倉敷市 木村千容

幸福は鼻で息することゝ識る
ぼんやりとしてるが白髭だけは伸び
合理化は機械と金を大事がり
展望車から耐乏を強ゆる井
蚊の涙ほどと労組折合わす

岡山市 田垣方大

時代劇を好きな妻なり平和なり

光市旧海軍工廠へ出張

爆弾の跡へ目高や水すまし
敬礼をした安置所の草いきれ
ワイフにも出張報告せにやならす

石川県 那谷光郎

子の破る障子見ながら慈父でいる
意表ついで出したヘソクリよろこばれ
窓からの視野のせまさに飽きて病み
返事せぬ答だヘソクリ勘定中

誘導尋問妻のうまさに引つかゝり

藥局のサビス医者の要らぬ程

石川県 野村味平
出張は市場の値段もメモにして
素行もなじつて提案封じ込み

大阪市 木村水堂

冷かして欲しい相合傘で行き
恋をする二人に長屋うるさすぎ
友情が職階制にへだてられ
本当の夜業で帰る靴の音
酔うている証拠は妻を恐がらす

熊本市 花岡英子

空模様傘もたせたいのに子は平氣
妹のほしい末っ娘の願い
山の駅汽笛へやつと改札し
美辞麗句あゝその奥を知らざりき

堺市 八木摩天郎

抱き合つて泣いた八月十五日
敗戦の世と云いながら云いながら
婦人代議士よくも女に生れける
引き揚げて來れば女房の影もなし
恥しい顔でクイズは引き下り

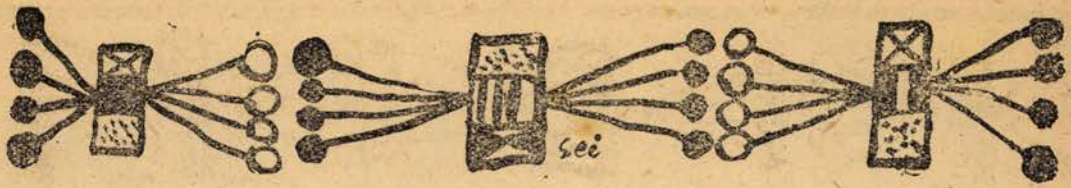
高槻市 福田丁路

握らせた金の効目に苦笑する
似たものの夫婦競馬の競輪の
二八・六・七 大雨警報発令

大雨警報何の苦もなく子は眠り

倉敷市 水谷谷水
人生の黄昏を往くチンドン屋
ペテン師の老いて身にしむ場末の灯
名声が夫君をてんで寄せつけす

なんのあんな失業保険で飲んで居り
無難作に肉を提供して生きる



怪物の様に税務吏つゝ立つた
小心を買われ会計相務め

葬式のほどぼりさめぬうちに借り
細君の氣配いやなにハツハツハツ

倉敷市 相原一善

制服の下は妖婦の血が流がれ
移動するキャンブへ娼婦まで移動

轉勤へ今宵の名残り縄のれん
返答つまりビシヤリ蚊をたゝき

岡山県 岡田夜潮

かんしやくが起きてる時に保険屋來
禿頭さかなの骨のように分け

馬鹿ばなし上手にやれば食えるなり

岡山県 中谷仙坊

夕焼の此処にも詩人一人居り
座談会女の事で外れ初め

生き字引何の變化も無い暮し

岡山県 政田大介

ソ・ラ・シ・ドがさつぱり出ない声麥り
尻向けたまゝの車掌の御案内

旧友に逢えばくらしを探り合い

大阪府 青柳扇子仙

落着いたあほによく似てフェミニスト
漫才のワテらワテらと男同志

八五郎ほどでもないがガラツパチ
どつちでも良いと言ふ氣が氣に入らず

失業に甘んじ歩く天王寺

大阪市 稻葉鳩花

ふるさは恋のいたでをいやすとこ
大佛のように座つて見合すみ

茨木市 下山清潮

水打てば日課が終る下つばよ

氣の抜けたような虹へも子は走り

岡山県 本田恵二朗

貴婦人のような顔して金魚ども
恥を知り過ぎてさつぱり儲からず

大阪府 眞鍋一瓢

男一人を殺してしめてすみまへん
男手をあまらせて雨降りつゞく

そこらまで送りませうと囁まれに來
問題の恋平凡に子が生れ

雲のそり／＼大阪だと言うに

京都市 松川杜的

ロマンスカーロハで乗つてゝ氣が疲れ
アベツクの顔を小猫に見つめられ

恋の後味尾灯に未だ残り

大阪市 永田六竜子

鴨川で洗つた顔とはチト淋し
一ト時の晴間え竿のありつたけ

鶏小屋へ麦茶の滓を捨てゝやり
招待に制服香水かけて呉れ

豊中市 村上ゆする

ポケットは保険会社の手帳なり
税務署の呼出し死んだ人に来る

殺される筈とは知らず毛虫來る

鳥取県 森本法泉子

病院で逢えば双方眼をそらし

鳥取県 日置文郷

新築病舎に移転

全快が出来そう初夏の新病舎
証券欄読んで病み居り御曹子

外人の喜ぶものに日本髪

大阪府 佐野牛歩

下落したイチゴ家でも買うていた
壱万円帯に短く預金する

心臓の強さと別に肺を病み
社用族又山中へ行く話

香港の手紙文珠の智恵で読み

大阪府 後藤梅志

ラジオから流れる調子捨て難し
赤字から秀才あわれ瘦せ細り

堂々たる体軀ホテルのボーイなり

大阪府 小池しげお

お家はん十吾のような人でなし
十三橋暮れて夜釣の風となり

レインコート人の迷惑知りまへん

兵庫県 竹内圭三

相合傘きれいな虹を見て帰る
公園のベンチ家出の娘も坐わり

夢の様な計画子供が出来る迄

留守番のように財布の五円玉
塵車ネオンの消えた廣場から

大阪市 山崎帆加夫

阿波踊りへ

阪神から小松島行（朝・晩）毎日二回出帆
▲恒例により旧盆には特発船も差建ます

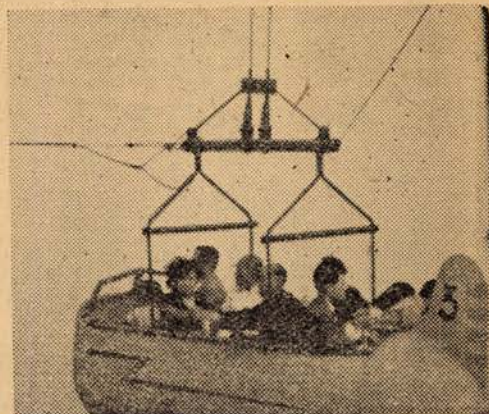
片道船賃 三八〇円

ご見物には……
お楽な船旅で

関西汽船

雨男

中島生々庵



一行吟

へ駒生の緑

梅雨とは言い乍ら今年は五月からの雨雨雨。その最中にこれは又いかな事「六月十四日午前九時集合。くらがり峠を越えて生駒山頂に吟行。雨天決行」なる企劃が幹事諸兄から発表された。而も雨傘絶対無用論者の路郎先生と天下の雨男生々庵を兼題選者に並べてある。一応此れは無謀極まる若気の至りだとも考えて見たが待てよ。あの連中のやることだ、何か裏の裏の策略あつての事かも知れぬ。路郎先生と生々庵の天通力を生駒山頂で皆様お立ち合ひの上で実験しようとの腹ではないか。異いぞ異いぞ。こゝに氣付いたのはさすが生々庵賢明のいたす所。考えるまでもなく雨男には百%有利な条件ではあるが念の上には念を入れ早速この旨雨雲に打電して万事ぬかりのなき様手配方を依頼しておいた。然し雨男に勝負名乗

りが上がつてあの峠道の雨にしよばぬれてどろんこ／＼になつた一行の姿を想像して見ると先生始め皆様に申訳けないやらお氣の毒やらで胸が痛む。が一方こんな企劃をした幹事諸兄に「まあ見ろい」と、嗟嘆を切つて平謝りに謝らせて見るのも愉快ではある。こうして複雑な思いが頭の中に去来し乍ら十三日も曇り勝ちのしとく雨と言う天候。勝算吾れにあり。——こんな思いで寝たものを——翌十四日の朝目が醒めたらどうだ。隅から隅まで青天井に晴れ上つて居る。三男とカメヲを引張り出した上六の集合地へ急ぐ。そこには当然過ぎる様な顔で路郎先生が立つて居られた。

相當な急坂だ

武部香林

「あともう十五丁位かなア」「そやなア」と誰かが合槌を打つ、今日はなぜか老人が多い。山の上から一人の美女が下りて来る。ホトギスを聴きにゆく慈光寺の女性と判つた。山上迄の里程を聞くと「こゝから二十五丁です。麓は勘定に入れないで里程標はこの辺りから計つてあるのです」と言う。田舎はのんびりして好いなアと僕は無性に愉快になつた。家族連れのハイキングコースになつて居る位だからと見くびつていたが相當な急坂だ。句箋などを入れてある風呂敷包をリリちやんの手から栗君のステッキに移して二人で差し合ひ先頭に立つて登つた。負けず嫌いの栗君の足は早い。寛の水に一息入れてみな元氣に進む。或いは遠く或いは近くホー

(香林)

ホケキヨ

汗を忘れて聴きはれる。あゝ何んとも言えない。漸く一軒の農家になつて道に古い石畳が敷いてある。この山中に全く珍らしい。極先に荷物を下ろして一同を待つことにした。勘のよい栗さんは、石畳の古事来歴をその家の娘さんに聞いている。昔園所のあつたところだそう、その頃は数軒の茶屋があつて、東海道を上る人々が、朝大阪を発つてこゝで風食をしたのだそう。尚娘さんの話によるとこの家の向い側に河内屋という

一番大きな旅館があつたのが今は見る影もない荒地になつて追憶のよすがも無い。一行が縁に腰掛けで休んでいると「テツペンカケタカ／＼」と直ぐ近くの頭上で声がした。初めて見るホトギスの姿をはつと見上げた時は早や右手の森にかくれてゐた。われ／＼がこうして醍醐味にひたつてゐる間に路郎先生は盛んに関所の研究をしてゐられる様子である。ホトギス夜聴くものと思いきやこれからまた山上に向う。道は細く坂はいよ／＼けわしくなつてくるが木立をぬけて来る風はだんだん冷たく山頂の近さをおもわせる。名も知らぬ小鳥の唄声に陶酔してゐたとき眼の前の枝に舞い下りた一羽の鶯、大きな口をあけて美声をはり上げた。先生も仰向いてジツと聴き入つておられた。全くこの鶯は人間情を知らず自然の中にび／＼と育つていて随所に溪渡りの妙音を惜まなくきかせてくれた。

溪渡り上手下手あり生駒山

(香林)

こゝに驚茶屋が一軒欲しいと思つた。峠を登りつめると例の生駒山上の天文台だ。爽涼の風は正に別天地である。山上には大阪の千里山を思ふような住宅もあり、芝生の円い丘を幾つも並べたようなどとも広々とした公園になつてゐる。庭を借りて芝生の上に兼題のピラこを無けれ風流な句礎を設けた。持参の弁当を拵けながら作句を始めた。こんな山の上に居ると大空は丁度お椀を伏せたように丸く見えて面白い。今日の最年長者へとも老が道中で竹を一本たずさえて来たが、それをバリ／＼へし折つて燃やし始めた。そうして持参のくさやの干物を出して焼いている、折箱をこわして火にくべる。みんないろいろ御託をならべながら干物を裂いては御馳走になつた。飛行塔へ先生の童心は動いて、われ／＼もおもわず誘われた。大阪も奈良も今日は霞のうちに消えて見えない。

暗峠

後藤梅志

香林さんが小生より五つ六つお若く、栗さんが更に十幾つお若い四年と分かつたのは、暗峠から生駒へかゝる道であつた。どうりで頑健な足であると思つた。峠のかり道で太つた梨里嬢の大きな風呂敷包を小生が引取りステッキへ差して肩へ掛け、次いで栗さんが代り、香林さんが合槌となり、八合目辺では、水筒、弁当包、背広の上着ワイシャツと三貫目余りになつたが、五十八歳半の小生は、完全に強力で値しない存在になつてしまつた。生駒へつづく暗がり越えは、可成り難儀であつたが、老人の意気は恐ろしいと思つた。路郎師、へとも翁、何れも六

十四、五歳か。本当に足腰の達者な人達である。子供連の足はさらに天真爛漫。河童の尻の如く頂上へ着いていた。

若いつもりが

友淵 貴山

一里も登ったかと思う頃生駒山上の天文台が見えた。やれ／＼とへたばつていと最年長者のへとち氏は竹の杖を仙人めいた格好でつきやら先へ行つてしまつた。やはり殿りは僕だつた。自分自身はもつと若い積りでいるのだが今年齢は争はれぬものだ／＼と情けなくなつて、両足のひざをボンボンたいてみた。やつと重い腰を上げた。先発隊とは五六丁いやもう十丁も離れているだろうと思うと重い足は自然と重さを増すばかりである。一行を見付けたのは弘法大師の石像の下から冷たい清水が沸きでる涼しい森蔭であつた。こゝで大休止となつた。栗氏は植物学者らしくそこら一面に生えている草花のいろ／＼について参会の子供達に有益な講義が始まつた。へとち氏はジャパニイズチュインガムの配給だと美味しい昆布をばらまいてゐる。生々庵夫人は昆布茶きらいだと生々庵氏から聞いたのもその時だつた。生々庵夫人には昆布茶を絶対ださぬよう一言付け加えておく、大方一時間も休んだらうその辺から道は割合に平坦だつた。驚、ほととぎすはひつくりなしに鳴いている。梅

志氏が突然ほととぎすは何んと鳴いているのかと御質問。僕はすぐさまテッペン売れたかと鳴いてゐると答えた。悪い事を言つてしまつたものだ。皆の視線が梅志氏の頭に注がれたが、梅志氏の頭には軽快な鳥打帽がサツソーウと乗つてゐた。

ほととぎすを聴く



来のは都々逸が記されてあるのが通常だが、此の日は皆川柳が書いてあつたのは偶然とは言えぬ奇異な物に感じられた。少しエロ的な見解になつて恐れ入るが、その辻占の一つに「お値段は下へ行く程高くなり」と言う意味の解せない？ 一句があつた。

山頂四四五米に立つ

小倉 へんち

白日晴天でも暗がり峠。鷲と杜鵑の景物で急坂も突破する。田植の済んだ山峽の水はけに薙を敷いた工夫は嬉しい。点在する農家に改増築の目につくのも衣食足りてを想い出されて闊米で作つた腰の弁当が重い。行程四キロを心易く通勤姿でやつて来たが中々どうして一行中の最年長者として当然殿りを務めて生駒山頂標高四四五米に立つ。時に煙霧立ちこめて展望ゼロ。緑草に薙を敷いて行厨を開き且つ食ひ且つ語り且つ作る。此の時江戸兎趣味のくさやのひ物を焼いて一同にすめるが売行不良とは思わぬ失敗。作句の発表が済んで最後に航空廻転塔に乗つたのは本日の庄巻であつた。

湯郷温泉納涼川柳大會

日時・八月十六日(月) 午前十時

兼題「夢」「無邪氣」「切れる」

「温泉」 各題三句

兼題×切八月八日 贈便

授句料三〇円(切手)同封、出席される方も授句と授句料を送られた

授句先・岡山県美作町林野榮町 田村藤波宛

暑中御伺

南区医師会文化部

杏林川柳会

河村 瑞川
黒木 弾正
牟田 一哲
長谷川 迷路
中島 生々庵
安岡 珊枝郎
海野 比呂史
南 捨舟
田中 烏耕
中島 兎庵
平尾 太希志
岩崎 一伸
山川 阿茶

昭和二十八年盛夏



昭和六年六月廿三日、本報の記者が、川柳不朽洞会員荒木哲水氏（旧姓井上、本名武）を、昭和二十八年六月廿二日午前三時十分、大阪府豊能郡箕面町箕面三七九の自宅で肺結核のため亡くなられた。享年三十一歳（大正十年七月十八日生）

哲水逝く

によつて退職。

川柳不朽洞会員荒木哲水氏（旧姓井上、本名武）が、昭和二十八年六月廿二日午前三時十分、大阪府豊能郡箕面町箕面三七九の自宅で肺結核のため亡くなられた。享年三十一歳（大正十年七月十八日生）

謹んでお悼み申上げる。
君は兵庫県美作郡射水村字入江の産。昭和十四年八月七日阪神電鉄に入社、廿一年十二月主事となり野田駅助役、御影駅助役中病におかされ、廿六年六月休職満期

死の一週間前に、
靈柩車一羽あわてさせ

君が川柳に手を染めたのは昭和十六年の春、阪神電鉄文化部川柳会に出席した時からで、荒木和子さんとの結婚生活をはじめてから、川柳句会にも出席し、熱心な作家の一人となり、昭和廿五年八月、水谷鮎美氏の推薦で川柳不朽洞会に入り、中堅作家としての君をほしきままにしていた。後、病を得て、鳴尾の明和病院に入院時代、川柳不朽洞会員田辺由布氏と同室だったので病院句会を開き同人数名を持ち病臥中も作句を怠らなかつた。資性慧敏明朗、闊病中も病苦を他に訴えるようなことはなかつた。闊病五年も実に川柳に恵まれた生活だった。

梅雨空へ妻子のこして西へゆく
梅雨空へ若きいのちの昇天す
の三句を、又死の三日前には、紙を持つて来るように妻に命じ、半紙一枚に筆太に左の句を記し、これを残しておくと云つたそうである。迷うまい蓮のうてなへゆく返は梅雨空へうてな露は虹の色
大きな文字で書かれてあるが二字くつたようになつた文字もあり、又哲水の哲などは字画もくずれていた。意識はハッキリしていても、もう筆を持つ力は余程弱つていたことが書体から想像される。しかし悠々と辞世句を詠み、ひそかに死を期していたことが思われ、涙なくしては読めなかつた。合掌。

遺族は妻和子（三十一）長男行雄（一）養父母。の四人

哲水句抄

眼帯がとれて娘のまるい顔
病んでゐて芥川賞あきらめず
三才ですしかし風呂では女です
ハンカチで今宵の月は包めそう
文楽は指できれいに叱つてゐ
子安観音余震の中に見つけ出し
瀬戸火鉢児のない妻の手がきれい
全身に感ずる愛のあらばこそ
自殺する者を笑へぬ夜のつき

ベットから見る青空の生きてゐる
早口の伯母の入歯が落ちかゝり
お土産はギッスでたりる若夫婦
話好き中元の礼云ひ忘れ
引揚げの喫茶店のランプの灯
草餅が溜の茶店へ暮れのこり
浮浪児の甘えて見たいミスボリス
自信ある男眼鏡の奥で笑み
善性の妻の無口の片えくぼ
奈良の町若草山から春の音
僕にでも出来そうピカソの顔ゆがみ
押売と話せば案外素直なり
妻の愛児の愛私はダルマさん

朝空へ夫の背中たくましく
生甲斐を観音様にそつと告げ
旅愁々々壁画の像が妻に似る
素通りの埃り名物にもかゝり
両手ですくへば目高きつと散り
胎動へ妻は男を生むつもり
我もかくならん箸で拾つたのど仏
帰郷した妻へ夜中の雨となり
ベットから見へる電柱へ活きたいなあ
都心華美ネオンへまるい月が出る
鼻唄で外米の石撰つてゐる
汗かきに車窓の風は青かりき

故荒木哲水追悼句會

日時・八月九日（日）午前十時
阪急箕面駅集合

会場・滝安寺（辨財天）

兼題・「虹」 滝道約五丁

「燈明」 中島生々庵選

「電話」 水谷鮎美選

席題・三題当日発表

費・五〇円（昼食持参のこと）

幹事 陸奥・繁春・水谷・古方・ゆづる

主 催 大鉄局支部・梅田支部・池田支部

後 援 川柳雑誌社

暑中御伺

川雑池田支部

戸 用 古 方

池田市井口堂一六四

黒 川 紫 香

池田市東市場町一七八

村 上 ゆづる

豊中市野畑市宮住宅

六八

竹 内 圭 三

兵庫県川辺郡川西町

小 戸 池 しげお

南河内郡丹南村丹南

川雑八代支部

佐野 ト 占

八代市大手町

一路集

社長

川村好郎選

激昂を社長の軽く受ける肚 南天
社長にもつばらにくれた過去があり 代仕男
母堂あり社長堅実主義である 葉光
末席へ社長の盃ありがたし 登志晴
嫌はれていると社長はつゆ知らず 七面山
眼鏡拭く社長慈愛のある言葉 光男
椅子廻し乍ら社長によいプラン 同
組合へ社長としての意見あり 正郎
ロボットの社長に斜陽が買はれて来 十九平
社長には苦手の銀行飛んで来る 清潮
どんじりに出た級友が社長殿 光郎
自家用に乗つて一等社長の気 恵二朗
社長まだ居る宴が酔ひきれず 天信
七光り社長の椅子にそり返り 芳泉
ゴルフでは社長も汗を知っている 山雨楼
ワンマンでない社長は宜給ひ 満年
社長の子を抜いて社員の子が走り 同
名門といふだけだけの社長なり 秋穂
ウンウン云うて社長知らねなり 摩太郎
社長ともなれば短気で世が通り 実信
社長にも息抜きのある三昧を聞き 嘉一
北浜が狂ひ社長も不貞寝する 一瓢
ゴシップも似顔も社長悪びれず 同
社長今日産婦人科へ用が出来 芳仙

級友

西尾采選

入社試験社長話せる人に見え 芳花
社長だけやりくり尽きたことを知り 良坊
社長さん喜慶を共にしてゐる気 谷水
釣場まで社長にゆづるとは悲し 方大
かげ口はどうであらうと社長なり 同
社長さんと問へば私と葉葉服 満佐志
税務署は社長に出頭させたがり 破天荒
物分り良い社長だが社は赤字 夢介
得意先社長が行つて値切られる 高志
佳考慮してと社長は軽く言ひ 誠史
佳無理だとは社長も内心思つたり 茶々
佳下級かみれば社長は飲むばかり 桂角
佳社運よし社長の小唄もさびくる 同
佳遊覧バス矢張り社長の坐る位置 青丹子
佳社長今日多忙御儀委員長 鮎美
佳商魂を燃し社長の廻り椅子 同
人・社長室の裸像の下で叱られる 太路
地・店の者だけが社長と呼んでくれ 鉄児
天・背伸びして社長の顔も知つておき 貞子
軸・社長今日社長忘れた糸を垂れ

級友は皆などんぐりの背くらべ 兼比羅佳
級友と詐欺のたねにつかはれる 満佐志
妻の名もいれて級友賀状くれ 夢介
級友もおなじだつた恐妻家 一瓢
級友に何分たのむ勤め口 鉄児
級友と遭ふて別れた河原町 誠史
級友を訪へば応接間で待たせ 同
クラス会来なかつたのが噂され 悦子
級友の母にむかしをひやかされ 葉光
級友の不幸続きをきかされる 山雨楼
肩書をとれば昔の君と僕 水堂
級友と言ふには余り亮けて居り 牛歩
狭くとも級友なれば泊らせる 青柳
級友と信じきつてたのが不覚 房子
級友の子の先生として訪ね 同
級友の出世電話で許り会い 鮎美
御主人の級友ですと寄つて来る 十九平
級友に名のれない程落ちぶれて 秋穂
十年振り遇へば級友貸せといふ 勢波
出世した級友みんなして使い 芳花
級友に会へばサラリー先にきく 圭水
級友の出馬にメガホン持たされる 高志
大臣もクラスメートといふ仲さ 雄声
級友の一人は所在否として 藤波
級友もう頼まれる身と頼む身と トン坊
級友も冥土の方が多くなり 破天荒
級友に会ふて級友の噂が出 意坊
級友のにごす話はなさぬ仲 木魚
級友とバツタリ遭ふ熱海の灯 七面山

本社八月句会

時一八月一日(土)午後六時
處一大阪市天王寺区下寺町二丁目
(市電下寺町又は日本橋三電停前下
車・市バス下寺町二丁目停前)
於光明寺

題「海」

「素人」

「胸算」

柳話 麻生路郎選
句評 水谷鮎美選

来会歓迎・鉛筆持参

川柳雜誌社句会部

川柳雜誌社特製

投句用 柳箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料八円



選郎路

先生

わたしなら私如きは掃き捨てる 姫路市 小畑自由朗
 長男に靴を呈して下駄を履く 同 同
 委員長に成った吾兒にアヂヤーパー 同 同
 買いに行く兒酌いでくれる 兒夜の膳 同 同
 孝行には及ばんぞよと子をさとし 同 同
 絶対に俺に似るなと子に祈り 同 同
 子故にあんたと二十五年とや 同 同
 俺以下もありうどん喰て逃げた 同 同
 禿げた喃と五十の息子でいたわられ 同 同
 啄木奴がこないなわしにしてしま 同 同
 川雑に三句会社へ持ち歩き 高田市 小川 学
 釣竿の二本の方はまだつれず 同 同
 天理教高い土地でもズバリ買い 同 同
 会いに行く人よりシャンな人に会 同 同
 あらためて歳を答えて叱られる 同 同
 デリ貧は紛失物を疑われ 同 同
 極道のあげく警察官となり 同 同
 万才の歌はやつぱり息が切れ 貝塚市 宮本 甲馬
 アベツクの片手に柳しごかれる 同 同
 つながれた牛の怒りは土を吹く 同 同
 蟬の声とう／＼見舞来てくれず 同 同
 うるわしき見舞へ痰がひつか／＼ 同 同
 日曜かそれで痰壺換に來す 同 同
 イエスの例天皇も又甦り 今治市 長野 文庫
 賣切れましてと悪いことでもした様 同 同

アベツクにちと目障りな一寸待て 同 同
 税として吸い上げられた接待費 同 同
 パチンコと映画に本屋挟み撃ち 同 同
 あの手この手盡きて成金歩に戻り 同 同
 二号邸富士の空箱もうたまり 米子市 小西 雄々
 虚無僧の痣を峠の茶屋で知り 同 同
 公園の鯉アベツクを見て泳ぎ 同 同
 ライバルが富士を喫ふから富士を喫い 同 同
 提灯の色三代でこう変り 同 同
 商魂か一円紙幣にもお辞儀して 愛知県 岩川 寛虚
 公私共マージャン狂の眼が赤い 同 同
 声変り小倉のズボンしいて寝る 同 同
 まだ百合に慰められて臥てゐます 同 同
 試射場へ極右極左が膝揃へ 同 同
 子供達一茶真似てしらみ取る 大阪市 石川 ひさみ
 好きでないひとでも金が逢へと言ふ 同 同
 女下駄つつかけパチンコから戻り 同 同
 噛みそを顔でルビーのイヤリング 同 同
 看護婦の恋愛吻を惜しみなく 同 同
 しばらくの晝寝帯鋸放つとかれ 佐賀県 南川 光男
 美談記事僕にはそんな友がない 同 同
 強情な奴と笑うて愛してる 同 同
 防空壕にまだ住む人がいて平和 同 同
 機嫌な日妻は雅号で呼んで呉れ 同 同
 桃割れに結つた昔の鹿の子が出 和歌山県 美野 百合子
 司会者の加勢でクイズ金となり 同 同
 おつちとちよいでトラツクの助手をさせ 同 同
 行商の嘘全國を股にかけ 同 同
 孤独忘れて豌豆むいて居る 同 同
 吹かれ飛ぶ線路の蝶は白ばかり 岡山県 富岡 青柳
 蹴つて見る青梅にある子の齒形 同 同

暑中御伺

橋本 緑 雨

大阪市東住吉区
平野西之町八三

須崎 豆 秋

大阪市阿倍野区
旭町三丁目一四

西 尾 栗

大阪府中河内郡
曙川村八尾木

富士野 鞍 馬

東京都新宿区若葉
一丁目一五番地

吉田 水 車

布施市新喜多三九五

大阪 形 水

大阪市東区系屋町一

菊沢 小松園 大阪市阿倍野区 玉子町三ノ三四	長野 井蛙 山口縣小郡	秋月 宏方 和歌山市今福北部一二八番 電話和歌山五八二九番	堺支部 八木 摩天郎 堺市九間町山ノ口	高槻市郡家新町六五一 福田 貞次 (丁路)	川雜下關支部 國弘 半休門 石川 侃流洞 坂田 良坊
---	--	--	---	--	--



一粒十円の芽が土を割る欲喜
思ひ出のベンチへ今日は父で掛け 岡山県 同
お前からよけて通れどひき蛙 岡本 薫翠
水鉄砲作つてやつてかけられる 同
平然として先生をやりこめる 岡山県 同
立腹も知らず人形の様に座し 同
人知れず花瓶へ花をさす内氣 同
ボールペン一ト先丸を書いて見る 京都市 鈴木 誠史
待合所表紙の取れた本ばかり 同
あの頃の松井須磨子父が好き 同
ゼリーだのベツリーだの時代の差 滋賀県 土守トシ坊
六十年経つたと見えぬ顔の艶 同
窓口で淋しく貰う今日の糧 同
姉妹が奪ひ合つてゐる母の帯 貝塚市 安永芙美子
先妻の妹貰えば又病まれ 同
病床へほりこまれてる 離縁状 同
英女王戴冠式 同
王冠を脱ればわが妻わが夫 貝塚市 河揚 梵鐘
大ジョッキあつてへツチャラ言つた顔 同
粗茶召せと住持の話好きらしく 同
商品と言ふには肌も荒れて居る 貝塚市 芝原 洋史
トンコ節歌つて妻の帰る頃 同
家計簿がプラスに成つたクイズ賞 同
臨終を二号冷たい眼でみつめ 玉野市 渡辺あきら
蝸牛住宅付で生れて来 同
疎開までさせた浴衣をオムツにし 同
鶏頭の友あり僕は牛後なり 大阪市 中江破天荒
土左エ門包んだ様な花屋の荷 同
妻からの電話交換台も聞き 同
おつちやんと呼んで呉れてる間も 同
それでよいと言へば家を建て 同

呼び付けられた私用ばかりへかしこまり 同
嫁ぐ手は札よむ手とは別のよう 大阪市 不二田三夫
ドル稼ぐ基地と洒落ても居られまい 同
割勘はだから飲む前集めとけ 同
すぐ金に換算をするくせがつき 和歌山市 西川 惠風
子を連れて遊覧船はやめにする 同
フオークダンス若い血潮がからみあい 同
彼も又善人らしい白い羽根 貝塚市 高崎 雄声
いつからか女は露出症になり 同
雨宿りいらぬ真も買つておき 同
金槌は借りて来釘は貰つて来 大阪市 岩垣一点子
童話もう始まつてゐる虹の空 同
そこにある軸の文句で叱られる 同
早稲田勝て早稲田が勝てで二十年 貝塚市 小島さぎす
療養へみすから離婚した勝氣 同
故障バス恋人めいて車掌居る 同
眼帯をしてゝも読書やめられず 倉敷市 野田素身郎
酔えば酔う程に無口で恐がられ 同
キツスしてから少くなつたプレゼント 同
蚊を叩く手つきもやはり藝者です 大和市 西谷 秀人
枕蚊帳寝息うかゞい市場籠 同
夕涼みする恰好で客を引き 同
借りに来た後姿がかわれなり 大阪市 木口 賀峯
ちき人に教えて見たくなる論 同
ラブレター歌謡曲から引用し 同
オーライ／＼ストッパで溝へ落ち 岡山県 沖 一糸
エロ本に見入る女工へベルが鳴る 同
口笛やネクタイ初夏にひるがへる 同
一年は新妻と云ふ身だしなみ 大阪市 中塚 夢生
写真だけ取ればお寺に用はなし 同
面当てが苦しい顔で死んで居た 同

川雜大聖寺支部 同

石川県大聖寺局区内
法ヶヶ坊 一四

平和文藝會

政田 大介

岡山縣赤磐郡輕部村

体温川柳會

貝塚市名越千石莊

小倉へとち

大阪市西区江戸堀下通
二丁目八番地
貿易商 永瑞行内

岩田十三楼

福岡市箱崎茶屋小路
電話 東 四四一五

正本 水客

阿万 万的

松川 杜的



農繁期日曜の手も借りて来る 和歌山県 久保田青竹
 子供故寡婦故に意地張りどほし 同 橋本 幸男
 細長うやつとりますと事務の隅 吹田市
 母さんは十九で子供産で居り 同
 釣にやりやれと云ふ妻の顔 大阪市 池戸 桃村
 隣寸一個これが昔の日給か 同
 釣竿の粗末な方が先に釣り 倉敷市 岡野風の子
 難問を知事貫録に物言はせ 同
 どん底の頃のが欠けた写真帳 岡山市 宗高ハヅ茶
 立説の揚句無い本開いて去に 同
 園丁が黙つて朝の反古を掃く 岡山市 津田麦太楼
 馬鹿にしくさつて偶にウインクス 同 丹波 太路
 おばあさんと言へば拗ねて妻 大阪市
 閑ですと言ふ小賣屋の合言葉 同 久保 和友
 パチンコの嫌いな男として育ち 滋賀県
 新聞の要点だけでも読めぬ日日 同 辻 圭水
 エチケツトどうのこうの十八・九 貝塚市
 切換が出来ずアバンは腹が立ち 同
 誰の子か分らず白痴唯笑ひ 大阪市 永田都詩子
 あいびきの映画妖しく胸に来ぬ 同 絹下 南天
 子を連れた散歩金魚屋までとなり 奈良市
 冗談にまで教養を見せて居り 同
 ネオンの灯望郷のペン取つて見る 岡山県 穂北ペン郎
 窓捨て身の安全を考へる 同 北島
 ラヂオから流れる笑ひも今日は癪 鳥取市 泉
 此の雨を逃がすものか苗を植え 同
 叱る子もなくて寂しいミレーの絵 岡山県 繁松 玉露
 貞操を奪れそうな宿に付き 同
 送別会追い出したのが世話をやき 京都府 堀 不漁
 政敵を送つて氣持晴々し 同
 本の通りつくつて榮養疑はず 石川県 杉浦 醉羊

人に好かれる會計でいて使い込み 同
 社長夫人になつて二号に悩まされ 岡山市 齊藤 一心
 外交は芝居上手な妻にさせ 同
 雨だれを詩的と思ふ病舎に居 神戸市 岩田 一夜
 こんなどこに住みたい車窓を見て 同
 斗病は妻だからこそ待つて居り 倉敷市 高木 正平
 女患部屋彼氏の声も聞えて来 同
 煙草の輪今日の氣持のまんまの輪 大阪市 神谷凡九郎
 空蒼し病臥の峠こした顔 同
 豊作の麦を頼つた借が出来 岡山県 國富 直人
 幼稚園隣が休むから休み 同
 幼稚園隣が休むから休み 岡山県 谷原 禿山
 見直した舞踊の時はおそすぎて 同
 晩婚を訪へば連れ子が出て迎へ 高槻市 辻 白溪子
 キヤバレーの送花ばらを見下げ 同
 餌豊かなれば鶏も争わず 山口県 田中 秋穂
 貧乏は里の自慢がしたくなり 同
 小麦色はこの化粧で買われる 岡山県 梶尾 節子
 二号にもなれず細々食つており 同
 子の前で話す夫婦の他人めき 芦屋市 戸部 龍馬
 足組んで女の知性見透かされ 同
 父ちゃんの酒代になる花を賣り 貝塚市 堀井 一峰
 病室も子供が来れば家庭めき 同
 父兄会他所の子ばかり手を上げる 岡山県 長尾 越鳥
 信用でこんな家まで建つと言ふ 同
 七曲りすれば楽しい我が故郷 岡山県 戸川 千流
 小使も落成式の列に居り 同
 撥を持つ手が雑布もかけて居り 岡山県 多田野保子
 アベックへわざとらしいぞ喉はらひ 同
 その後に来るもの知らぬなまけもの 大和 高田 同
 天才が二人もあつて組がもめ 同

暑中御伺

作 郎 四 田 沢

院 医 田 沢 ・ 科 兒 小

三ノ一通本出玉区成西市阪大

戸 倉 普 天

兵庫県水上郡沼貫村
字小野

川 村 伊 知 呂

大阪市南区桃谷町七一

北 川 春 巢

大阪市北区東扇町二一
大阪市交通局病院内科



不精髭見合だつたへ少ししてれ豊中市 水野 水茶
 子供等を集め花火に出資する 同
 新婚に二階貸しやんーばかり続き貝塚市 中辻 芳男
 当選の感想妻にもマイクが来 同
 友からの便りは恋をしたまへと 大和 高田市 戸田麻由美
 ビール酌ぐ娘が亡妻を思わせる 同
 ランデブーサリ袋此処にあり 熊本市 高野 宵草
 あの辺で帰りやよかつた二日酔 同
 銀座より立派な柳がある田舎 倉敷市 松村 意坊
 手遅れの愛が彼女を嫁がせる 同
 化粧費が赤字になるほどつて見よ 大阪市 清水 望峰
 政治家が悪いとはねを上げて過ぎ 同
 良縁を嫁がぬ嫁がぬで取返し和歌山県 見岐 瀑子
 産む丈けは隣に負けず襦袢干し 同
 アベツクのボート流れに逆らはす 松江市 原 章坊
 十二才の顔で援助を受けざる氣 同
 地下足袋へ初夏の日射し射る如く 岡山県 大塚 稔
 この坂が登れて嬉しい三輪車 同
 母の日も母は知らない母であり 今治市 越智 一水
 たゞ逢えることが嬉しい青春よ 同
 賣物の別荘草のしげるまゝ 大阪市 長田 塗杖
 もう耳に達しましたかど笑い 同
 左右から傘の滴に電車来す 京都市 松下京一樓
 引揚の故郷眼に沁むものばかり 同
 晝寝する仲間へ猫もともにのび 岡山県 池田 古心
 嫁にほし田植の娘見て戻り 同
 聴診器しばし忘れて株のこと 和歌山県 浅川 桑南
 よく言へば角がされてる古狸 同

要件をなか／＼言わぬ女客 大阪市 安井比左志
 倦怠期おんなじ趣味で無事にすぎ 同
 温泉場のなげき金氣のある澁茶 高知市 岡本 元馬
 御國への奉公は酒の税でたり 大阪府 柏木大八郎
 保護願出して帰れば戻つとり 岡山県 佐々部 義彦
 飲む方が得と知りつく／＼を買い 京都市 高岡 薫
 儂なさはクイズ應募の療養所 大阪府 難波 櫻天
 つれこみの他にお客のない旅館 貝塚市 竹内雨季舟
 空洞が三ヶ所もあるリンゴなり 大阪府 友田 楓士
 せうらぎに合せてはたる高く 岡山県 南部ひでを
 まつ先が乙にすました鐘一つ 貝塚市 福島 丁坊
 一本の傘でよいのに氣がきかず 大和 高田市 横田 江浜
 想像に委すと映画切つてあり 和歌山県 岸本 木魚
 宮様も日の丸弁当でにこ／＼し 岡山県 中尾 貞教
 茨木崇徳庵
 花びらも掃かす牡丹を惜しむこと 芦屋市 里田 一十
 病院の古参は青くやせて居り 貝塚市 高崎 竹声
 ソプラノとバスの声する日曜日 大阪市 岡島凡柳士
 砲弾にかもめも遠く國を愛え 石山県 桑山 とき
 金縁を掛けて質屋の冷たさよ 出雲市 久家代仕男
 惜別は雨にも濡れて今宵発ち 出雲市 日野加壽緒
 強情な父と息子へ母は老け 和歌山県 岩崎 君代
 職を得た婦りの胸に白い羽根 大阪府 小沢 文糖
 耳遠く母は永生きするらしい 大阪府 西口 鎮景
 付き合つて見れば味あるむつ／＼ 大阪府 壽々木青嵐
 昨夜見た夢を占ふ氣の弱さ 和歌山県 谷口喜久治
 病院の恋水枕貸して出来 大阪府 小沢 桂月
 牛乳を飲んであやめを瓶にさし 大阪府 川崎 南石

川柳友之会

佐野牛歩

外一同

帝國化工 大阪工場内

吾郷玲人

大阪市住吉新地

藤本満年

藤本茶々

東京都目黒区平町二五

北壁堂

三鴨美笑

米子市道笑町一丁目
三四

川雑浜寺病院支部

膳所新三



川柳の歴史

二月の巻

福田山雨樓編

主要事件、行事、動勢人事等

昭和三年二月五日B.K.から川柳の夕放送(句会、合評、寸劇、参加番傘川柳社、三太郎、紋太)。

同四年二月週間朝日に明治中興史「新川柳昔がたり」を関孫六の名で掲載。同五年二月東京大村新蟬居で先輩謝恩会が開かれた。その頃珍らしい顔合せだった。同二月号改造に「新川柳に現われた社会の顔」を剣花坊執筆十五頁。同六年二月号むさしの天王人の筆名で「大阪だより」を執筆、八年十二月までつづいた。同七年二月番傘川柳社二十周年記念として大阪三越にて川柳趣味展覧会を催す。同八年二月武蔵野川柳会は番傘川柳社からの柳誌交換拒絶の文書を公開し応酬した。同十二年二月番傘川柳社二十五周年記念大会を大阪中央公会堂で開催、四五〇名出席。尙第三回川柳趣味展覧会を三越で催す。

(追補) 昭和十三年十二月久良伎翁古稀祝に川柳人協会主唱の下に有志から金屏風を贈呈した。

主要圖書の出版

明治四十二年二月(以下何れも二月につきこれを省略)川原閑

舟著「俳句と川柳」が立川文明堂から。大正二年「十句集第二輯」が中京川柳社から。同年西原柳雨著「川柳難句類解」が博文館から。同五年藤波集文編「類題川柳名句選」が東西出版社から。同七年有明堂文庫「新川柳狂詩集」が有明堂から。同年沼波武夫著「柳樟評釈」が南人社から。同年柳樟寺新屋会編「川柳一九二二年集」が同会から。同十五年吉成剣突坊編「大谷五花村句集独活」が東北毎日新聞社から。同年当百、水府、勝平、共著「明治大正時事絵川柳」が輝文館から。昭和二年森田鶴東著「時代川柳大観」が春陽堂から。同三年近藤倫坊著「川柳をたづねて」が博文館から。同年井上剣花坊著「江戸時代の川柳」が近世日本文化史研究会から。同年大谷五花村著「川柳礼讃」が東北川柳社から。同六年久田狂水著「川柳花のかげ」が川柳あけぼの社から。同七年海野夢一著「川柳巷談はしからはしへ」が山本書店から。同九年森雞牛子編「溪花坊川柳隨筆」が川柳叢書刊行会から。同十年安波半我著「半我自選句集」が川柳犬の鹿吟社から。同十二年矢野蛇の磨著蛇の磨句集が

同氏から。同年前田雀郎著「句集榴花洞目録」がせんりう社から。同年高橋月南編「高橋重子句集白椿」が同氏から。同十三年平野武夫編「皇軍慰問川柳集」が問屋たより社から。同十五年梶元紋太編「ふあうすと難詠選集」がふあうすと川柳社から。同年斎藤半七著「句集塵」が彩雲社から。同十六年石島吐月峰著「吐月峰句集」が同氏から。同十七年大谷五花村著「独活の大木」が日本俳詩協会から。同年正木準章著「輝く青丘人」が朝鮮川柳会から。同年谷脇素文編「川柳漫画傑作集」が講談社から。同十八年麻生路郎編「陣中川柳」が興亜書房から何れも出版。

主要誌の興廢

明治四十二年大阪から「柳道」創刊。同四十五年横浜から「春雨」創刊。同四十二年京都から「へそ茶」創刊。同三年京都から「ぎをん」創刊。同八年京都から「紙衣」創刊。同十年横浜から卯木、夜叉郎らによつて「川柳詩」創刊。同年神戸から「のし」創刊。同十二年大阪から「小康」創刊。同年小樽から五呂八らによつて「氷原」創刊。同年神戸から「白扇」創刊。同十三年広島から「蛇の目」創刊。同年横浜に浜の会創立。同十五年天津から「蒙古風」創刊。昭和二年東京から「紅座」創刊。同年東京に關東川柳聯盟が生れ、「昭和川柳」創刊、二号限りに終

暑中御伺

高鷺亞鈍
石井白面人
大西野介
龜山晴峯
益永貞女

烏ヶ辻川柳会

(イロハ順)

市場没食子 池戸 桃村
井上露芳 橋本 峰春
橋本幸男 西川 惠風
西辻竹青 西口比呂志
尾崎方正 小沢 史葉
若林草右 吉田 斜水
多田禿天 津村 神峰
中谷葉菜子 山本 信陽
足立春雄 木村 喜男
水谷竹莊 森下 愛論
客員 北川 春巢

南海電気鉄道株式會社
川柳部

坂田良坊

水害御見舞を深謝いたします

下関市新地町二
下関鉄道病院長官舎

特殊紙器工業株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一

る。同年東京柳眉会から「六文銭」創刊。同年京城から「川柳の夜」創刊。同年「日本川柳新聞」廃刊。同三年神戸から出ていた「覆面」廃刊。同年山口から「詩ぐさ」創刊。同年大阪から「柳の窓」創刊。同四年八幡から来入らによつて「くろがね」創刊。同年京都から光風らによつて「紅椿」創刊。同五年大阪から「鼎」創刊。同六年名古屋番傘後援会から「傘の雫」創刊。同八年石川県から藻の花らによつて「三叉路」創刊。同年高知県から「川柳村」創刊、安芸橋の改題。同九年東京から「川柳しぶや」創刊。同年横浜から「ふいご」改題「川柳まとい」創刊。同年大阪府から「糧」創刊。同年金沢から紅花らによつて「活文堂川柳会」創刊。同年金沢から「柳人街」創刊。同年小樽から休刊中の「氷原」再刊の前ぶれとして「氷原会報」出る。同十一年京都から「せんじん」創刊。同年東京から雀郎を中心として「せんりう」創刊、十三年まで続く。同十二年大阪から「三味線草」復活。同十三年仁川から可寄らによつて「高麗川柳社」創立。同年東京から出ていた「柿」休刊。同十六年東京から山沢碌々らによつて「古川柳研究会」創立。同年京、御所車、川柳ビル草薙を綜合して「大京都川柳社」創立。

著名川柳人の他界
木内機楽坊（大連）は大正十一

年二月五日逝く。小林一考（天津）は昭和二年二月二十五日長逝。今井卯木（横浜）は同三年二月三日五十六才で永眠、古川柳研究家、江戸砂子の著あり、明治時代大阪で活躍。櫻原美起夫（仙台）は同年二月八日二十七才で病歿。大橋かい痴（大阪）は同四年二月二十四日逝く。安井欣女（大阪）は同五年二月二十八日二十八才で病歿、ひろし夫人。植田湖舟（蜷ヶ池）は同六年二月一日二十九才で倒る。川維支部幹事として活躍。石川きう三は同七年二月九日五十六才で永眠。豊橋川柳同人。茨木奈緒美（蜷ヶ池）は同年二月二十三日二十二才で倒る。近藤飴ン坊（東京）は同八年二月十二日五十七才で長逝、剣門の餐宿、著書数種、選評に令名があつた。佐藤墨菴は同十一年二月十八日永眠、山形柳界の元老。平井姫小松（大阪）は同年二月二十九日病に倒る。田中五呂八（小樽）は同十二年二月十日四十三才で逝く、氷原川柳社主宰、新興川柳の闢將。橋緩勾配（旧豆仏、大阪）は同年二月二十二日三十九才で他界、ふあうすと同人。福田淳鬼（大阪）は同十三年二月四日山の療養所で倒る。畑田炭車（大阪）は同年二月十八日五十才で永眠。林已善（岡谷）は同十四年二月十六日長逝。小田五連発（竹原）は同年二月十八日逝く。吉村半彌（東京）は同十五年二月八日四十六才で急逝、川柳研究社幹

瓶の銀山

大阪市大津區長柄
西通一丁目四四番
山銀硝子株式会社
電話 堀川四四七番

事、健吟家。柴田五万石は同年二月九日五十八才で永眠。横沢貿易川柳会を興した、光頭でも有名。大窪文芳（松山）は同年二月二十八日五十一才で長逝、川維支部幹事名古屋でも活躍。奥野其奥（旧禿山、大阪）は同十七年二月十三日五十七才で他界、元川維同人、ふあうすと同人。村上浪六（東京）は同十八年二月一日八十才で永眠、明治時代からの作家、川柳の著書あり。津田清扇（神戸）は同十九年二月四日病歿。添田曜禪坊（東京）は同年二月八日七十三才で長眠、古い作家。

（追補）砂山岳紅（川崎）は昭和二年六月六日卒去、大正末期柳の葉末を自ら刷つて研究家に送る。沢田五猫庵（別号例外）は同年十月一日静岡で逝く、奇行多く末摘花難句註釈を出した。

▲本稿は「今月の歴史」の附録であるが、小生の病勢悪化を救済するため改題したので御覧を乞ふ。

川柳雑誌社ハワイ支部

ワイロー社

同人一同

大万川柳会

須崎	上田	小川	亀山	新川	木口	松江
豆秋	春柳	恒明	晴峯	博也	賀峰	梅里

川梅田支部

（順ハロイ）

岩田	長谷川	横田	中塚	眞鍋	飾間
一夜司	小倉へどち	永田里十九	山崎帆加夫	藤本春夢草	森石
石岡正司				水谷鮎美	幹事

同

松山市 前田 伍健
 ほどけゆく心小鳥がつぎ／＼に
 嫁にやり嫁を貰つて親寂し
 柴田早苗屏女優の臺がたち
 M S Aじわり／＼と義理嵩み

大阪市 麻生 葭乃

ニューカーの目立つブラット水も撒き
 御苦労さんと云ひ度い雨の田植見る
 子が出来て床の飾りとなつた琴

やゝあつて雷峰を替へて鳴り
 鉄瓶をおろして雨の音と知る
 葡萄棚雨もみどりに降る國府

詠

大阪市 橋本 緑雨

言うことも忘れ二人で飲んでいる
 千日の灯は一人では飲めぬとこ

柳界展望

本社八月旬会は一日午後六時から下寺町二丁目の光明寺に於て開催来会歓迎▼故荒木哲水追悼旬会は八月九日(日)箕面灌安寺で開催される(別稿広告参照)大阪通信病院川柳会は七月十八日午後二時から三階図書室で開催▼南区医師会文化部杏林川柳会は七月廿一日午後七時半から太希志居で開催▼大阪市警視庁警察部警察学校文化講座(川柳講師、麻生路郎)は七月三日及び廿四日午後一時から二時四十分まで開講▼南海電鉄川柳

▼三井造船川柳同好会(玉野市)は六月廿五日三友クラブで開催された▼宮城重幸氏還暦記念川柳碑除幕式が七月十二日午後四時に宮津町の滝上遊園大口仁王橋畔で開催、午後二時から同所テント内で建碑記念両丹川柳大会が開催された▼青蛙川柳会(伊丹市)は七月十三日午後五時健保会館で例会開催▼玉野市主催第三回波川海水浴場で納涼川柳大会が八月九日に開催され川雜岡山支部から風来子氏が出席する▼函館川柳社七月例会は十二日午後六時から鶴岡町鶴友会館で開催▼海峽親善川柳大会(青森県)が八月二日午前十時から浅虫温泉県民会館大広間で開催される▼静岡川柳社七月例会は一日午後六時半から同社で開催▼川柳きやり吟社八月の旬会(東京都)は一日夕六時から千代田区神田須田町柳森神社で開催される▼川柳研究社(東京都)の七月例会は十九日午後五時半から日比谷神社々務所で開催▼川柳社人(仙台市)復刊第一号が七月一日刊行された発展を祈る▼川柳なかさきは六月二十五日に五、六月合併号を刊行して休刊された▼松本文太氏(石川県)は粟の穂で月二回旬会を持つていられるが、羽咋が、あまりふるわぬので、粟ノ保から出かけて世話を焼き久しぶりに旬会を開いたところ二十人ばかり集つたとのこと、今後の発展は氏の努力に俟つところが大い▼川上三太郎氏(東京都)は六月廿七日、

暑中御伺

川村 好郎
 大阪府泉北郡高石町北四六五

木村 孤浪
 平塚市馬入二九〇九

土井 文蝶
 大阪市西成区松通九ノ二二

石居 高志
 東京都杉並区西高井戸一ノ八三

山本 葉光
 岡田 夜潮
 阿倍野局区内王子町
 ニノ五三電(四〇〇八)

岡田 夜潮
 岡山県英田郡美作町大字北山

阿倍野区阪南町西二ノ三三

石田 沐天

日置 文郷
 鳥取県東伯郡倉吉市大字越殿町厚生病院静風荘三号

日本文化放送で療養の時間川柳選評をされた▼速水真珠洞氏（福岡市）は七月一日には子夫人同伴で来社され路郎主幹と久しぶりに歓談された▼川村伊知呂氏（大阪市）は今回川柳番傘会の理事長に就かれた発展を祈る▼藤井米三氏（下関市）は六月廿八日から軽い中風とも神経痛ともつかぬ病気で臥床されている由一日も早く快癒をお祈りする▼堀内睦風氏（愛媛県）のおたよりでは大洲は床下少々浸水程度で大した被害はなかつたが農作物の損害は甚大とのこと「水郷のよき水には慌てさせ」の句を寄せられた▼米沢睦明氏（愛媛県）のおたよりでは大洲は四、五十戸の浸水家屋を出しただけで大部の人家には被害が少かつたとのこと、氏の留守宅は無事。

窓口談義

麻生路郎

Sから来たはがきに、「欠伸か

水害御見舞申上げます

九州その他を襲つた六十年振りの豪雨で災害を蒙られた地方多数の御愛読者ならびに柳人諸君の皆様は心から御見舞申上げ御無事を御祈りいたします。

川柳雜誌社
川柳不朽洞会

みころして春のお葬式」と云う私の句が、発表されたのと父の死去と同じ時期だつたので、親友の川柳家から種々誤解をうけてなやんでいます。この句は春によそのお葬式に行つて出来たもので、父の死去の時に出来たものではないので困つたことになつたと思つています。出句した時期が悪かつたことを今更のうちに残念に思つて居ります。どうにかならないものでしょうか。父に対する孝養は一時もかかしたことの無い僕なので、ほんとにはほんとに困つたことだと思つています。僕のなやみをお助け下さい」とある。私はこれを読んでそう云う場合もありうることだとなづくと同時に、この作者も、この作者の友人も、川柳は作つていても、川柳と云うものをホントに知つていないことを知つた。川柳は決して報道記事でもなければその人の歴史の機軸でもない。と云うことを知らなければならぬ。川柳はいつもよく私が解

説しているように、その人の人生観や社会観や世界観を詠んでゐるのである。この作者は真実と云うことと、事実と云うことについても混同しているのである。自分の身辺や心境から真実や真理を掴むべきであつて、事実とは自ら区別しなければならぬことを知らなければならぬ。事実を詠んだからすぐれた川柳になると云うに限つた訳でなく、事実からは句に強い線が出るに過ぎないのである。二号の心境を詠んだからと云つて、自分が二号である訳でもなく、二号を持つてゐる訳でもない。友人の言葉は一笑に附していゝであらう。



暑中御伺

川柳雜山支部

田代尋四

酒井ひかる

小西無鬼

川柳雜誌社京都支部同人

暑中御見舞申上げます
水害で戻れぬ故郷打診する

速水真珠洞

大阪にて

京都市東山区山科勸修寺下ノ茶屋三四

京都市左京区浄土寺真如町四

平 岩 司 郎

村 松 夢 裡

同東山区山科勸修寺本堂

同左京区鴨北園町四六

山町六

長 尾 案 生 子

石 川 よ し ろ

同左京区岡崎田勝寺町

同東山区清水靈山町五

京都通信病院内

今 田 蘇 海

大 鶴 喜 由

同上京区衣棚寺之内上ル

同左京区太秦安養寺面影町一

井ノ下 秀 人

高 岡 薫

同上京区衣棚上靈前下ル

京都府北桑田郡弓削村

井ノ下 晴 芽

京都府林業指導所内

同左京区下鴨下川原町六九

京都市上京区相国寺北門前町上ノ町

岩 見 キ ヨ

田 中 千 潮

岩 見 と く じ

田 中 烏 雀

同東山区山科厨子奥尾上町一四

同上京区鞍馬口通室町西入

小 林 龜 一

八 木 迷 々

同東山区山科御陵鴨田町三四

同東山区山科川田西浦町二六

溝 川 ち か 子

柳 本 憲 一 郎

溝 川 き よ し

(ABC順)

佐賀市水ヶ江町郵便局裏

大阪市東住吉区桑津町七ノ三二

南 川 光 男

西 い わ を



いのちある句を創れ

投稿規定

▼用紙は原稿用紙・文字は正確
▼開催月日及場所記入
切毎月二〇日
▼投稿先本社宛

本社七月句會 (大阪市)

七月四日 午後六時

於 光明寺

庭の立樹は雨に濡れて鮮明なみどりの画面が今にも広間へ迫つて来そうである。作句には読え向きの天候である。路郎師の柳話「年の勢というものはすべてのものに表れるものである」ということに就いて語られた。古方氏の句評は笑いは人間の優越感から生れるものであると提唱され笑いのある句、笑いのない句の例句として一点子、三四詩、木魚、蒲佐志の諸氏の句を引用された。席題兼題の披露後当夜の不朽洞賞優勝カップは中島生々庵氏の手に落ちた。閉会九時。(幹事)出席者 路郎・古方・潮花・黙平・一瓢・塗杖・水客・杜的・帆加夫・牛歩・京一・樓・寛峰・登志晴・一郎・葉乙女・島浦・豚平・辰始・凡九郎・摩天郎・淡舟・丁路・賀峰・正斗・玲人・水堂・ゆずる・一夜・悦朗・杏花・しげお・圭三・柳笑・清・淀月・夢生・圭水・香林・秋窓・破天荒・春巢・正司・鮎美・雅集・与呂志・番葉・夢裡・六童子・都詩子・雄声・狸仙・生々庵・紫香・栗・ひろし・恒明・少将・へとち・梨里・霞乃。

兼題 「夫 婦」 麻生路郎選

老夫婦つめたい掌握りあい 栗
二夫婦どちらも気兼ねしてくらし 夢生
悪縁ですよと銀婚むつましい 糸平
胸の内丈けで白髪を妻を褒め 杏花
宅が家内がと平凡にくらし 満佐志
金故に夫婦は又もいがみ合ひ 正司
別々に昔の夢を追ふ夫婦 賀峰
長男のカメラへ夫婦とも笑ひ 古方
こと趣味に關し夫婦はゆずらない 潮花
密入国の罪でもくぢけぬ夫婦愛 へとち
失職をしてから夫婦らしくなり 淀月
愛情のさめた夫婦にすぎ間風 豚平
老夫婦茶人で家具が皆光り 春巢
水臭い日もあり夫婦面白く 潮花
金婚のぼつ／＼吊柿に似て 香林
音のせぬように生きてる老夫婦 ゆずる
若夫婦笑つてばかり居るのなり 香林
夫婦しておなじ事で子を叱り 水客
夫婦とはよいもの灸すや合うて 春巢
宿願は京へ住みたい老夫婦 玲人
夫婦説本ねまきは派手にせよといふ 一瓢
空想がまだちよつびりある夫婦 少将
夫婦とも踊る神様をば信じ 帆加夫
夫婦だとなんぼ言ふても疑われ 生々庵
たしかめるつもり奥様と云ふて見る 生々庵
円満のお手本と云う老夫婦 柳笑
夫婦かいなあと漫才の顔を見る 破天荒
山門で夫婦仲よく腰をのし 兼比羅
夫婦に成つたばかりの汽車をのし 糸平
大声でめでたがられる老夫婦 一瓢
共稼ぎ優越感に妻が持ち 夢裡
舞台では女房が強い夫婦なり 恒明
荒れた手も希望につく若夫婦 六童子
アベツクに見られともない若夫婦 生々庵

似たものゝ夫婦で部屋が片づかず 正斗
始めての子へ夫婦の眼あきもせず 与呂志
夫婦気取り帳場はちやんちゃおかしがり生々庵
老夫婦一ノ日何も云わず暮れ 路郎
より降りまんなんや老妻になさるわ 同
名ばかりの夫婦と知らぬ公益社 同

兼題 「三 角」 水谷鮎美選

三角のテントを張つた夏の山 季賛
三角な土地へも大阪家を建て しげお
三角の題に苦しみ寝てしまひ 賀峯
サインコサインを／＼親に口答え ゆずる
三角関係今年はどうも子が生れ 雄声
ミスボリス三角帽が美しい 賀峯
三角を勉強してます好い息子 狸仙
三角な店だがキャンデー良く売れる 破天荒
羊かんを三角に切る子沢山 しげを
三角な顔になつて夜の馬鹿 水客
三角をピカソは丸として望め 七面山
三角に切つてウイロが並べられ 潮花
三角に折つてそれから母の智慧 糸平
三角の土地も余さぬターミナル 水堂
三角の軒が老舗のにぎり酢 淀月
難解な三角むつと草いきれ 帆加夫

兼題 「庭」 小川恒明選

御主人が寝込んでますの庭の草 しげお
雑草の庭でよし俺の詩が生れ 杜的
丹精の庭へ覗る眼のないお客 雅集
梅雨の雨庭の金魚があふれ出る 季賛
苔寺の苔ハイヒール濡らすなり 春巢
庭だけは広く月賦で建てた家 水堂
死んだ子の墓の隅で錆び 鮎美
庭を掃く丈けが仕事の楽隠居 丁路
庭下駄の不服は庭が狭すぎる 少将
只今と云ふ庭からの投げ靴 同

小兒科
内科
性病科

安岡醫院

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南〇三二四六

庭の隅爪切草の強く咲き 与呂志
校庭を大きく廻る優勝旗 塗杖
新築の庭で出世の子と撮し 柳笑
花鉢庭は夜露に濡れたまゝ 潮花
料理屋の庭水道の溜が落ち 圭三
日曜の庭は女の手を借りず 潮花
お庭から隣同志はゆきゝする 圭三
一家みな花火線香と庭に立ち 糸平
紀の川が真下に見える庭の月 潮花
うちの庭春夏秋冬日が射さず 正斗
庭賞めてゐればきれいな虫の声 紫香
花買つて庭の狭さに突き当り 香茶
雛が居るなと思ふ庭の糞 潮花
仏様拝まず庭丈け見て帰り 杏花
遠洲流と云う庭の落葉のせもよし 栗
先代の落葉もあつて古き庭 島浦
掃き癖があり片隅が高い庭 番茶
先ず庭をはめて来客上衣脱ぎ ゆずる
こんな庭で泣いて呉れてるきりぎりす 生々庵
庭下駄のボーイズを記者にせがまれ 淀月
庭の隅きつちり見える家に住み 香林
住む人が住み庭石の生きて来る 恒明
席題 「提 灯」 正本水客選
提灯が出てから祭らしうなり 牛歩
提灯を出して本家の目出度い日 水堂
提灯をついてボートが押し出され 潮花

提灯がバツサリやられそうな道 柳笑
 提灯の下で御興と人がゆれ 紫香
 提灯を大きく振つてさようなら 淡舟
 提灯屋なでこしい／＼返事する 栗
 提灯がついて寿司屋は肌を脱ぎ 一瓢
 提灯のこゝや／＼と振つてゐる 恒明
 提灯が一ツ易者は場所を占め 帆加夫
 ビル街に提灯ゆれて寺を知り 寛峰
 夕涼み子へ提灯をつけてやり 帆加夫
 提灯ふら／＼金借りにきて頼りなし 鮎美
 提灯を返しラムネを飲んで去に 潮花
 ほろよいで出れば提灯肩をなで 主三
 提灯の風へ一石置いた首 紫香
 提灯へ名取りする子の名が書かれ 柳笑
 御神燈をくぐり新婚宿へ着き 潮花
 提灯の灯にまだ早い宵祭 主三
 提灯がゆらりとゆれて山車が出る 栗一樓
 名優が持つ提灯へ息を呑み 柳笑
 さし上げてゐる提灯へ荷を渡し 黙平
 提灯が故国の夜にくれる 水客

席題 「同情」 富岡淡舟選

又一杯喰つても母は同情し ゆずる
 同情へいつそあわれな声になり 恒明
 同情など受けたくないと未亡人 主水
 同情を孤児強情につつばなし 牛歩
 同情はします／＼と貸さぬなり 栗
 竹筒へ小さい同情集めて来 紫香
 同情の裏に感じた好奇心 杏花
 同情はしますがねえと安定所 京一樓
 母だけが孤児の鉛筆買ふてやり しげを
 同情をする相談がまともらず 鮎美
 同情はしても法律まげられず 丁路
 同情をされる別室とはなりぬ 水客
 同情のもう悪智恵をつけにくる 凡九郎
 肩先へ同情をする手のぬくさ 紫香

同情についとか／＼と踊らされ 夢生
 同情をまともにはうけた不倅せ 正司
 同情に父が許した貯金帳 黙平
 同情と別に小さな義理を立て 玲人
 同情は素直に受けて起ち上り 潮花
 同情を嬉しく受けた日を悔ひる 潮花

席題 「中年」 西尾栗選

中年の仲居素顔のまゝでよし しげを
 中年だからストリップもがよりつき 正司
 中年の女男を云い負かし 賀峰
 中年になつて節々よく痛み 京一樓
 中年の男の言葉信じられ 香林
 中年の押しで値切つた子の服地 一瓢
 中年によくありそうなきヤンダル 悦郎
 中年になつて思い当る事がふえ 生々庵
 人生論中年の苦悩説みとれず 秋窓
 中年の本気で子供欲しくなり 杏花
 何思ふ中年からの舞扇 六童子
 中年の女の皺がヒスにする 香林
 中年の男の自信崩れかけ 同
 悪趣味もあつて中年嫌われ 玲人
 中年に金が出来ると云う手相 牛歩
 中年の恋は青楼でほろにがし 鮎美
 中年になつて作家は俗におち 秋窓
 中年のうぬぼれ言いたいことを云い 香林
 中年のあきが見える月参り 夢生
 中年の視線団扇の風に乗せ 水客
 中年のまだ就職が見つからず 京一樓
 貯めた金と肥えた中年ひやされ 清
 中年に金も度胸も出来てくる 玲人
 中年の恋へ親族顔を寄せ 摩太郎
 中年が蝶ネクタイでもてゐる 一郎
 中年になつてそらく右派が好き 破天荒
 中年と云う名を思ふ 脂汗 番茶
 中年増と云ふ名のダリヤめき 栗

川 堺支部句会 (堺市)

五月二十三日 於 摩太郎居

貯金帳はつきり女難だとわかり 莫平
 惚れられて女は恐いものと知り 貴山
 長男は女難の相がある弱気 操子
 刑務所に居ても女になやまれ 賀峰
 女難の相と聞いて彼女も氣を遣ひ 雄声
 女難とも知らずにしてる膝枕 摩太郎
 旅がらす女難の話おもしろし 水客
 女難とは嬉しいことを言うてくれ 昌男
 酔ふて手を出せば女難の相と言ふ 貴山
 ゴミ箱のやうにボケツト使われる 凡九郎
 ボケツトもたまに知つて賢母型 摩太郎
 連達が僕のボケツで一休み 凡九郎
 有りだのボケツト切符出さず来 湧泉
 何時の日の浮気ボケツの座席券 きさ子
 ボケツトは不運な僕を知つてゐる 梅志
 ボケツトに春の思ひ出はるの草 水客
 辻堂で頑固を笑う雨に逢ひ きさ子
 長男として威厳は頑固だけ 操子
 父ちゃんのがんこ隣で聞いてくる 莫平
 末の子のあくびトランプしやされ 操子
 待合所あくび同志で目を外らし 梅志
 あくびが今右へ移つた面白さ 昌男
 あくびする人をあくびをして見つけ 同
 二三人とんであくびがうつて来 同
 水仕事尽きぬ女の幸に生き 操子
 水撒いてとに角掃いた事にする 貴山
 水まいて今日一日を締めくく 南風郎
 水かへる金魚に独り言を云い 梅志
 男女同権貴男にさせぬ水仕事 操子
 撒水車の音立てず来て恨まれる きさ子
 ふるさとの水ヘダイヤの手を浸けて 同
 睡眠薬のんだコップの水と知り 水客

川 日立櫻島支部句会 (大阪府)

五月三十日 於 日立造船所 真鍋一瓢報

スタンドも新婚の座の色になり 一瓢
 新婚の祝ひ故郷から母も来る 清潮
 お料理の本で赤字は里が埋め 吞水
 新婚の間悪友遠ざかり 芳扇
 全快の日へ持ち越した貯金帳 望峰
 全快は子供の無理も聞いてやり 牧湖
 腹痛もなほり梅干まだ残り 玄米
 梳髪でよし全快の小豆粥 潮花
 市場籠イチゴの箱の出る日なり 万亀子
 苺一箱下へも分けて夫婦喰べ 千代美
 みつ豆のなかでイチゴの色が派手 花子
 ベランダの苺へ館の風が吹く 花子
 苺むし／＼子供色氣のない喰べよ ひさみ
 恋ひとつ持たず子と来る苺狩り 花美
 苺皿客とは別な色で喰べ 幸子

川 弓削支部句会 (岡山県)

六月六日 於 金光教会所 福島鉄児報

品質優良
タチカワペン
 TACHIKAWA PEN
 タチカワペン
 タチカワゼム
 タチカワ画
 大阪市東区豊後町四八
 立川商事株式会社



温泉の由来も聞いてつかつて居 風 樹
温泉へ時候外れに行く不幸 牛 歩
特権のように社用の別府行き 鳴 子
駆け落ちの死なぬ命を温泉につかり 鉄 児
温泉の宿からも来る年賀状 不老
その危機を救つてくれた子の貯金 七面山
旅先の水のことまで母は云い 大 戸
苦勞して貯めた老後が不倖 白 頭
汝等は何苦勞すと蛙鳴き 奇 童
苦勞したことは書かない為替が来 一 貫
娘には娘の苦勞口紅塗り直し 七面山
仲人に苦勞知らずと付け加え 大 戸
持参金付けても売れぬ娘に苦勞 よしあ
放蕩も苦勞の中に数えられ 巷 雨
税金の重荷貯金も忘れて居 鉄 児
虎の子を使い果して全快し 令 甫
新世帯つもり貯金へ熱を上げ 七面山
旅に出る鞆へ肩の凝らぬ本 笑 泉
旅々と放浪性を發揮して 鳴 子
洋傘を忘れて旅の父戻り 牛 歩
アドバンス見えて都会へつゝ汽車 令 甫
これやこの行くも帰るも雨の旅 笑 泉
苦勞性だつたと母の事にふれ 同
気苦勞は嫁も姑も五分と五分 一 貫
こぼしも矢張り求めて居る苦勞 風 樹
再婚は苦勞の道を知つて嫁き 柳 童
卒業に母の苦勞の服が待ち みよ子

川 雑
浜寺病院支部句会 (大阪府)

贈所新三報

姑の目には化粧がまだ濃すぎ 風 鈴
閉止期の二号に負けぬ厚化粧 閑古鳥
思ひ出の妻の化粧が娘にかはり 白 蛾
久々の化粧に母も若返り 桂 月
カルメンのような化粧に引張られ 橋 村
シーズンには貸ポートにも化粧して 東 潮

お化粧がしれる娘の勤務先 鎮 景
化粧記事みんな美人になれるよう 夢 郷
退勤へもう口紅も引き終り 漫 太郎
舞台とは別な化粧で会いに行き 風 鈴
退院と云ふ喜びの化粧する 秀 月
薄化粧どきどき開けばレントゲン 三四郎
ルンペンの口笛かくる朝があけ 楓 士
口笛も吹いてくれるか子の元氣 白 蛾
口笛へ添寝の母は目で叱り 雅 人
口笛を寝巻のまゝで吹く日曜 高 峯
口笛へビルの窓より手で答へ 小 雀
病窓の口笛いつしか郷愁に変わり 風 順
ホーホケキヨ口笛吹けば籠も啼く 春 雪
口笛も資本の一つ虫の声 横 壽喜
口笛の合図を母に感付かれ 新 三
アベックに口笛吹いてにらまれる 醉 月
口笛のリズムで掃除の新世帯 大 入道
熱狂の口笛が鳴るホームラン 漫 多朗
女だてらとさつち口笛叱られる 青 嵐
心臓の弱さが貯めた白い羽根 閑古鳥
心臓は白つばくられて脱税し 貞 春
新入社主あ心臓ねとマークされ 三三坊
心臓でかなわぬ恋に体当り 舞 子
心臓の弱さ異性の友がなし 風 鈴
心臓と心臓ばかりの三つの唄 溪 泉
心臓はタイズくできたへられ 一 川
心臓をドキンとさせた当り籤 文 糖
心臓も見合の席で痺れ切り 南 石

角一ゴム川柳句会 (大阪市)

五月二十七日

福本嗣骨報

中之島野外彫刻展を観る みどり
彫刻も良しアベックもよし野外展 風 桜
線追へば女の意ふ型になり 一 草
大空の下芸術は生きているもの 雄 歩
ポリニウムが豊か平和な像であり

抗論のまゝ彫刻へ陽が沈み 一 子
円曲線疲れた心にふれてくる 喜 代
みどり児にふくまふ乳房贖がやまし 百合子
動くは群裸像静かに灯に立てる 夏 六
観る人の心にまかせて裸婦の像 豊 野
裸婦像の乳房川風にちと動き 翻 骨
逢ひ曳きも彫刻展へ歩をすゝめ 鮎 美

川 雑
下関支部句会 (下関市)

六月十四日

於 下関駅

石川侃流洞報

一生を五寸の鉢に終る運 一 亭
生き死を預けられてる博士の手 一 亭
待ち呆け会つたとたんに怒とけ 仁 美
泡吹いて生きる物ありドブの中 木 陽子
困い者金魚と同じ日が続き 九 呂平
女先生たしなみだけの紅をぬり 同
荷を置いた所で金魚屋水を替え 柳 慶
友にだけ採用通知届いてい 皮理智
来ぬ客へ手をよるこは菓子とり 同
酒の席話せばわかる人だつた 時香園
待ち呆けしばし小石を蹴つてゐる 半休門
浮き沈む金魚も奥は風寝なり 吟 町
わからずや話をしてんで受付けず 銀 町
女先生子持ちはちがふ叱り振り 同
話だけ聞いて置こうと軽く受け 柳 坊
半日も待たされ二分で落む話し 司 棧
日向葵の大輪燃える隅に寄り 藤 人
信じたい気持ベンチで待つ煙草 同
金魚売りの飲んで金魚の水を替え 藤 市
待ちぼうけ素うどん味もなまなり 同
一匹が動く金魚みんな逃げ 同
脈をとる博士へ安堵の母の顔 同
雲一つ出ず雨乞いの火が消える 同
金魚鉢間借りのを大きくする 同
良い方に解釈をして待ち呆け 同

版写謄田阪

二五町田芝区北市阪大

会 商 田 阪 株式 会社

番一九九五 島福話電
番 四 ~ 一 三 六 五

川 雑
貴生川支部句会 (滋賀県)

五月九日

於 夢生居

注文の見合写真に念を入れ 黄瀬美秋報
注文さう今日もパチンコしてしま 白 露
注文がわんざく／＼とめでたい日 夢 生
娘のきもの注文すれば嫁にらみ 輝 子
注文をつけて横綱未だ立たず 俊 子
注文がとれてうれいべタル踏む 美 秋
すき焼の豆腐はみんな祖父へ行き 春 果
新家庭豆腐一丁を食べ残し 紅 月
青帯になつて寝技も板につき 迷 羊
柔道の素足で帰る寒げいこ 美 秋
梯子段柔道部という音で降り 斗 志
よく喋る物売買へば又喋り 凡 骨
お喋りの効あり税吏退散す 四苦峯
喋るべし声からすべし総選挙 木 人

七五三の袂は親の苦をしらず 凡骨
雑川 出雲支部句會 (出雲市)

五月四日 於 岬月居

尼 緑之助報

失職へ若葉は容赦なく萌えて まさる
幸運な恋をひろつて帰省する 岬月
セルの娘へカメラを向ける 柿若葉 独 仙
運不運脱み合つて 連報板 芳 風
スランプへ挑む瞳がむきになり 代仕男
妻の無事神に祈つて男の子 莊
初老とはなりぬ運勢向いて来ず 朱 爾
又母が持ち出す無事でいた手紙 緑之助

川柳友の会句會 (大阪市)

五月十九日 於 帝國化工大阪工場

佐野牛歩報

迷信のちまきも釣つて鯉のぼり 辰 始
子ぼんのう風に吹かせる鯉のぼり 雅樂太
鯉のぼり猫も屋根から眺めてゐ 葉乙女
鯉のぼり青い目の子へ掲げこり 不二子
鯉のぼり一年ぶりを泳いでゐ 一 平
時間切れ名句も出すアジャパー 乱 醉
失敗もアジャパーで押す気の強さ 寛 峯
逆転のユラアジャパーですまされ 十九一
珍客にあれから後の話が出 翠 風
気まづさも珍客が来て助けられ 豚 平
珍客が鴨にされてるレストラン 一 朗
珍客に飲まして文句聞かされる 島 浦
珍客へ大阪の裏案内し 牛 歩

雑川 梅田支部句會 (大阪市)

六月八日 於 阪神ビル

水谷鮎美報

皇太子テレビへ別れの手を振られ 一夜
洋行中人の児になる皇太子 へとち

雑川 備前支部句會 (岡山県)

五月十六日 於 浜田久米雄居

浜田久米雄報

半半が異国の土の皇太子 雨水
大役ははるみで良い皇太子 いち平
新薬を笑つて母の欠け土瓶 夢 生
新薬へ最後の望みかけてみる 左 近
新薬を買ふのに切抜持つてゆき 豊
新薬へせんじ薬を母信じ 方 眠
新薬をつぎ／＼おぼえまた癒へず 三 司
二三人前で品切れあゝしんど 鮎 美
品切れの管があとからあゝ出 夢 生
売切れと書いて問屋と値が合ず いち平
父の名を云へば朝日を出してくれ 夢 生
品切れと別にルートがあるのなり 帆 加 夫
品切れを二三軒聞く土産物 三 司

敗戦の受身悲しい子を姪み 甘井子
十八九舐れば解けん花の帯 同
友達に女性に欲しい貸ポート 歌 流 児
悪友の折紙がつく二日酔 同
さくら鯛もつて無心によつて来る 運 平
ひかえ目の性がいつつも受身なり 半 仙
一生は受身ちいさい灯をともし 正 洲
助け船只木片を見て帰り 同
処生術母が受身で世は丸し 柳 風 子
酒に目がないのが助け船になり 東 岸 子
友達と酔ふた歩道の影坊子 娛 句 案
いつか見てゐる受身の血がたまり 久 米 雄
友達達の白髪を笑ふ方もふけ 同

雑川 淀川支部句會 (大阪市)

六月二日 於 武部香林報

アベックでメクラの春の風を切り 信 雄
スクーター乗れる身分をうらやめ 礼 三
スクーター若い野心を乗せてくる 勝 己

雑川 玉造支部句會 (大阪市)

六月十三日 於 雅美居

徳永雅美報

スクーターの月賦逃げてるスクーター 花 村
スクーターサラリーマンを追ひ越した 若 菜
藤棚で子を遊ばしてレース編む 都 詩 子
失業え藤棚で見る募集欄 六 竜 子
藤棚の下で酔う気が座をこさえ 水 堂
藤棚の影寒々と格子縞 若 菜
ザリ貧にドカ貧ゴリイグマウエイ 花 村
私の噂の中を通り抜け 水 堂
南無観念とナメタジに塩をかけ 香 林
暖か込んで花も若葉も日に疎し 香 林

雑川 京都支部句會 (京都市)

於 仲 源 寺

村松夢裡報

その位置へ並んでからの雛の段 親 生
喪服着て並ぶ姉妹のまぎらわし 清 子
窓並ぶその中にあり勤めあり 晴 芽
竿竹に並ぶ貧しさかわいてる 豊 次
相傘のしづくが肩にのる遠慮 良 太 郎
絵日傘に一さし舞へたらと思ひ ち か 子
明日返へす傘をいたわる指の先 いくを
傘のない児傘の間を走りぬけ 紫 蘭
借傘の破れおす／＼念を押し 光 二 郎
借りた傘荷物になつた花曇り 誠 史
朝喧嘩したをケロリと迎い傘 紅 寿

番傘の骨ゴミ箱の邪魔にされ 紫 蘭
洋傘に蛇の目は恐く上へ逃げ 誠 史
呼鈴に声なく傘が干してあり 甫 三
あの人を入れて上げた俄雨 久 子
時雨からおぼこが帰る露の傘 みてい
急坂となつて結んだ手が締り 蘇 海
急坂の高さへ庭のある生活 紫 蘭
急坂の汗頂上の風に冷へ 晏 子
急坂の緑をバスの銀が縫ひ 草之助
急坂になつて驚鳴くをやめ 夢 裡
急坂にかゝつたらしい夜のバス いくを
あきらめて故郷へ帰る荷物棚 みてい
あきらめる誇を持つた妻の顔 美 年
諦めて今日の生活にたへてある 鳥 省
後妻でもよいと三十越えてから 久 子
諦めは一人手酌で酒を飲み 誠 史
ボスターが諦めさせぬ淀の穴 磯 夫
夫の限界知つてる妻が笑ふ丈け 重 夫
斗病四年母より医師があきらめず 久 子
失明の險に消えぬ酒の色 豊 次
あきらめ切れず噴水を見ている 良 太 郎
リンゲルの効め問はずに諦める 夢 裡
諦めの笑い淋しいものに触れ 豊 次
あきらめのよい子に育てたよりなし 親 生
諦めてしまへどうせと思ふ貸 生

東京そばと

灘一とすじ

アベノ橋地下映画食道街

大 萬

梅里の店

★大万川柳(第卅回)を募る

兼題「夜店」路郎先生選

締切・八月十五日 句数五句以内

発表・八月廿一日(店內に掲示)

御投稿は大万宛・どなたでも



編輯局にて

★九州の豪雨稿で各地の愛読者や柳人達の災害が少しでもすくないように祈りながら編集をした。最後の編集までに被害のやや判明した分だけ別記した。★被害地の範囲があまりに大きいので見舞の方法もなく、いつ着くかさえ判らない通信に頼つたのに過ぎなかつたことを御ゆるし願いたい。★本年の梅雨ぐらいいだら／＼と降つたことはなかつた。大阪でも相当の豪雨であつたが本社は高台なので被害はなかつた。特に御見舞下さつた方々に厚く御礼申し上げる。

★本号は原稿がフクソウしたので次号に割愛したものが多く、筆者並びに読者諸賢の御寛恕をお願いする。★八月十六日の午前十時から岡山県の湯郷温泉納涼川柳大会が小学校の講堂で開かれるので、私は十五日から出かけることになつた。週末旅行の出来る人達はぜひ顔を覚えて欲しい(路)

不朽洞

会から

▼藤本満年氏(東京都)は岡山へ出張の帰途、七月二日午後、生々庵居で路郎師、生々庵氏、夢裡氏等と歓談、路郎師の

案内で、大方に梅里氏を訪ね、次いで東天下茶屋の特殊紙器KKで亜鈍、晴峰、貞女氏等に会い、翌三日午後特急はとで帰東された。

▼中島生々庵博士(大阪市)は七月二日夜、心齋橋の世界飯店で誕生祝賀の集りを御家族で催され、特に、木村杏園(画家)、麻生路郎の両師を招かれた。▼増田耕民氏(鳥取市)のお便りによると中島鉄洲氏が病氣のため入院されたと、目下詳しいことが判らない何れ後報。▼本田恵二郎氏(岡山県)は八月十六日の湯郷温泉納涼川柳大会準備のため七里の道を往つたり戻つたりの奔走ぶり、一人でも多く出席して氏の労に酬いてもらいたい。▼路郎先生は大阪新聞の日曜特輯欄へ毎日曜に時事川柳を寄せ好評を博されている。▼前田伍健氏(松山市)からの通信によると「各地出水、本県も大洲地方が最もひどく、町中船で救出の有さまでしたが、やつと平穩に帰りました。松山も三〇〇ミリ降りました」。▼新川博也氏(大阪府)は六月二十九日に志摩半島志摩荘へ公用で出張一泊された。▼路郎先生夫妻は六月十八日に奈良県宇陀郡三本松村の上田翠光居を訪問、翌十九日帰阪された。▼福田山雨樸氏(横浜市)はその後次第に好調とのこと。▼直原七面山氏(岡山県)は七月八日から八月一

日まで東京警察通信学校中級幹部訓練生として入所するため七月七日に上京された。

▲佐野ト占氏(八代市)

「八代市は低地の方が浸水があつた位でしたが熊本市は全く目も当てられん位の被害でした。熊本は阿蘇の山津波で押流された火山灰の泥が浸水して来ました為水が引いた跡は黒い羊糞でも固まつた様に床下は勿論床上三尺も四尺も残りその泥を排するに必死の作業をつづけて居ります。熊本在住の川柳人の消息もまだハッキリした事は判りませんが大島瀧明さんの宅の方は全然被害なく、田中先生ととも高地にあるため何の被害も受けて居られません」。▼松川不水氏(下関市)「小生宅は無事でした御安心下さい。実際今度の雨は小生生れて初めてで雨量と云い期間と云い全く物凄いのでした」。▼弘津柳慶氏(下関市)

「私方は杜宅が高台にあり浸水は免れましたが赤土が流れ込みまして折角の自給菜園が完全に埋没いたしました」。▼花岡英子氏(熊本市)「字も忘れてしまつた様な氣でペンをにぎつております。幸い私も家族も無事、御安心下さいませ。昼の上浸水で後始末に毎日

國文學解釋と鑑賞

川柳一〇〇の研究・鑑賞作法

七月特集増大号

価二〇〇円
送八円

江戸の名媛の川柳は、今や文芸の街路樹と茂りあまねく読者の愛を呼んでいる。近頃各方面の注目をあつめて特集号となる。國文學研究家も川柳実作家も是非御一読を。◆歴史と比較研究 俳諧の前身から川柳の確立へ 麻生路郎氏(川柳研究家)◆古今川柳の鑑賞 上三太郎(俳句と川柳)石野良雄氏(古川柳研究家)オカ・ヒロウ(鑑賞家)◆川柳の味について 麻生路郎氏(現代に於ける川柳の意義)大村沙華氏(川柳のおかしみと諷刺)浜田義一氏(川柳の人情美と庶民性)阿部義雄氏(滑稽詩としての川柳)岡田南彦氏(川柳の作り方)岸本水府氏(岡田川柳と百人一首)比企輝人氏(川柳と世相)吉田徳司氏(川柳鑑賞)富尾しげを◆解説と鑑賞欄 古事記 倉野 〇枕草子 池田 〇源氏物語 佐伯 〇奥の細道 杉浦

忙がしく今日やつと何とか体をのばせる程度になりました。はり板に新聞紙をひき座をしいて昨日まで寝返りしたら床下に落ちそうなる寝台でした。考え様によつては無事だつた事だけでも生きてる事だけでもありがたい心一杯でおります」。▼阪田良坊博士(下関市)「全市三分の一位は浸水で死者十二名位、拙宅は新地なので床上浸水、玄関は腰まで、私としては生れて始めての水害で一寸びつくりしました」。▼国弘半休門氏(下関市)「関門トンネル浸水不通、徳寿丸、昌慶丸で下関博多間一日一回往復の海運に切替辛じて九州と本土間の輸送をまかなつています。小職は駅にあつて全く輸送一戦不眠不休の苦闘をなめています」。▼有働芳仙氏(熊本県)「小生宅は別状ありませんでした。何卒御休心下さい(中略)熊本市を歩いていても口紅をつけている女性がいない程まだ復興の空は遠いようです」。▼高田抱逸氏(大牟田市)「今度九州の大川をはさむ熊本、久留米、門司市附近が最も大被害をうけております。大牟田市は海岸方面新地辺りが約五〇〇〇戸の浸水で鶏全滅といふところ。特に拙宅は町内でも高地の方で雨漏数ヶ所ですみました」。▼石川侃流氏(下関市)「当支部同人中の罹災者は浸水二、三名あつた丈で別に異状はありません(中略)山陽線は小郡駅以西はズタ／＼に切断され九州線は門司、小倉が山津波で物凄いの惨状を呈し下関駅ホームから肉眼で泥の動きが二十九日の風頃まではつきり望めました」。▼桑原養菊園氏(大分県)「小宅は床上浸水に止まり大した被害もなくすみました」。▼峰尾魚氏は東京へ転任と共に俳句と両立しないのを感ぜ六月限退会された。

至文堂
東京新宿区弘方町二七

暑中御伺

川柳雜誌社

日立櫻島支部

丸尾潮花
山口秋花
野本吞水
稻葉鳩花
下山清潮
眞鍋一瓢

川雜出雲支部

出雲市 原 独仙
同 森山 壯
同 野村 岬月
同 島根県 多和 朱扇
同 平田町 久家代 仕男
島根県 曾田 大朗
長浜村 尼 綠之助
出雲市 高松

川雜大和支部

上田翠光

奈良県宇陀郡
三本松村向瀬

大阪東淀川区三津屋北通二九

川柳雜誌社淀川支部

木村水堂
西森花村
鈴木天貧
武部若菜
武部香林

川雜貴生川支部會員

山田季贊
山田スミ子

広島県可部郡区内
龜山村綾ヶ谷

川柳雜誌社岡山支部

不朽洞會員

浜田久米雄 水谷谷水
逸見灯竿 梶原一善
鈴木九坡 田村藤波
大森風來子 岡田夜潮
福島鉄児 中谷仙坊
服部十九平 坂井三葉
大森娛句樂 政田大介
延永忠美 白井三林坊
大倉四案 岡村牛耕
水田千石 本田恵二朗
中村ただみ 井野格一
木村千容 白井吞風
田垣方大

Printed in Japan

募集

課題吟募集

親類(十句) 水谷 鮎美選
失敗(十句) 菊沢小松園選
(八月廿日締切)

外交(十句) 橋本 綠雨選
故郷(十句) 古川摩花麗選
(九月廿日締切)

每號募集

近作柳樹(雜詠廿句) 麻生路郎選
川柳塔(雜 詠) 麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)
(毎月廿日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼『近作柳樹』は一般作家の雜吟を募る。

▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行

川柳雜誌 第八卷

定價 四〇円

半ヶ年 二六四円
一ヶ年 五二八円
(転載禁)

昭和廿八年七月廿五日印刷
昭和廿八年八月一日発行

大阪市住吉區南内方代西五丁目二番地

編輯兼發行人 麻生 幸二郎

大阪市住吉區南内方代西五丁目二番地

發行所 川柳雜誌社

郵政口座 大阪 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 315

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

避妊には...
ゼリー剤を!



★溶ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で深部へ送るからタンポンに負り御使用を!

サンシーゼリー

山之内 1瓶 2 太郎 3 サンシー



たっぶり
愛顧たっぶり
B1 たっぶり

疲労と脚氣に

強力メタボリン

錠・庄・無糖庄

酒販用紙コップ 食堂用紙製品 一切



アイススクリームは
堅牢で衛生的な
この容器で

特殊紙器工業株式會社
フタバパップ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶壺 (66) 2302・2303

大阪名菓

もなか民かまど

源氏の最中

百貨店著名菓子店にあります
大阪市阿倍野区晴明通二ノ一九
民かまど本舗
電話 (66) 三四〇九